



348  
32B



始



34B

32B

他力眞實の信心

特 231  
185

他力眞實の信心



住田智見著



## 序言

さきに丁子屋書店主藤井氏の請に應じ、小寺隨時の施本又は雜誌所掲のものなどを取り集めて「弘願眞宗の信心」と名づけて刊行をした。然るに又これにもれたるものもあらば集めたしと求めらるゝまゝ、手近に残れるもの數篇を贈り、これを「他力眞實の信心」と名づくころと、した。これ元より多年の間の隨時の施本などにて、まごまりたる著述にもあらず。或は又重複する所も多からんことを恐る。見ん人これを寛恕したまへ。さきの弘願眞宗の信心とは、善導和讃の御語に基づき、今他力眞實の信心とは、天親和讃と御文二帖目第三通の御言に依れるつもりである。たゞ

これ佛恩師恩の萬一の報謝に擬せんとするに外ならぬ。

昭和八年春三月十二日

尾州蓬戸山房にて

住田智見識す

# 他力眞實の信心

## 目次

法を聞く用意	一
勘定を離れたる慈悲	五
信は第一着なり	八
芥子ばかりの池	三
平生の所作に就いて	八
自然の徳	二
安心小話	二五
腹帯は要らぬ……呼ばぬ時も……親は側に居たのです……親の里は二つある	
一月一日の箴	二九

歸命の一念……………三三

宿善到來の仕合せ……………三七

時機相應の法……………四一

本願力廻向……………四五

佛は大醫王なり……………四九

法然聖人の化他……………五四

如來の本懐即ち我が素懐……………五八

眞宗の源流……………六三

畢竟依……………六六

安心小話……………七〇

開宗と祖師聖人……………開宗でない開宗……………繁昌の地方……………

讃仰の季節……………七五

開宗七百年……………八五

唱導の御辭退……………聖人の御晩年を思ふ……………御同朋の生涯……………眞の御遺弟……………

眞の善知識……………聖人の御化導……………威徳・廣大の信

眞實の教……………一〇五

法藏の願力……………一一三

このお彼岸の時節……………一二九

遺弟の念力……………一三六

萬劫にも得がたき信心……………一五三

法然上人と女人往生……………一五八

眞宗の教法……………一六七

眞宗の教旨……………連如上人の御勸化……………契丹國人の來疆……………大和民族の理想

女人成佛の和讃……………一八四

和國の基礎……………一九二

聴聞の心がけ……………一四  
 精神立國は各自端守に在り……………一六  
 名號不思議の信心……………二〇三  
 まず眞實の信心……………二〇九  
 この精神を學ぶべし……………二二三

目次終

法を聞く用意

求法ぐほふごか求道ぐだうごかいふごころは、近年きんねん盛んに申まうすごころであるが、これは決けつして輕々かろくのごころではない。また信仰しんかうごか安心あんしんごか、ごいふ言ことばが、種々しゆしゆなごころに用もちゐられてゐるやうであるが、これも餘程よほど、心を注とぎめて見みねばならぬごころ、思おもはるゝ。私わたくしには固もとより深ふかき素養そやうがあるごいふのでは無ないが、この事ことばかりは、お互たがひに十分ぶぶんに相談さうだんさせて頂いたきたいと思おもふのである。

信仰しんかうごは、一點てんのすき間まのない、疑うたがひごうても疑うたがふごころの出來でぬ、而しかも何なんごもなく心こころに有あり難がたく感かんぜらるゝ決定けつちやうの心こころである。それ

にござるかするご、「私はこう信ぜようご欲ふ」ごいふやうな言を聞くごもあるが、それは信仰でも何でもない。たゞ思ふたご云ふだけである。

信仰の前には、智慧も、名譽も、何にも無い。随ふて善人も悪人も、智者も愚者も、全く同一である。そこでこの信仰を求むる求道ごいふごころは、只よい加減に、聞いて見やう位では、結縁にはなろうが、たしかな信仰の人ごなるごころは出来ぬ。

「御生一大事ご存ずる人には、御同心あるべき由、仰せられ候」ご「蓮如上人御一代聞書」に出である。また「佛法には、身をすて、のぞみ求むる心より、信をばうるごごなり」ごもある。

禪宗の慧可和尚は、臂を断ちて、達摩大師に尋ね、三井寺の千

観大徳は、空也上人の「身を捨てよ」の一言によりて、念佛に歸せられた。法然聖人は、十五の歳に無常をさごりて、黒谷に隠れ、四十三歳の春まで、餘事をなげうたせられ、親鸞聖人は九歳の春、叡山に入り、晝夜を分たず、寒暑を忘れて求め、二十九歳の春、始めて他力の信仰を得させられた、ごいふごころは、今申さずごも皆能く承知である。

この事を聞いてある人は、それは昔の大徳であるから、そんな事が出来たが、我々は到底出来ぬごいふ人もあるが、是れは能く考へねばならぬ。後生の大事ごいふごころは、昔も今も變りはない。

強いて命をすてねばならぬではない。何にも換へられぬ一大事



ごいふことの覺悟が入用である。「蓮如上人御聞書」に「我、死ねご云は、死ぬる者は有るべく候ふ、が信をこる者は、あるまじきご仰せられ候ふ」ごある。死にもかへられぬは、信仰である。昔の大徳方や、妙好人ごいはる、信者が、非常の艱難をして求められたる、この他力の御旨を、唯こ、で心を入れて聞くだけで、頂くごことが出来るご云ふは、まここに仕合はせではありませぬか。(明治四十二年四月一日)

### 勘定を離れたる慈悲

世のなかには、常に權利ごか義務ごかいふごことが大層やかましく言はれております。權利のあるごころには、義務が附いてゐる。義務をつくさねば權利はない。これだけ働けばこれだけの錢がまうかる、特別に精を出せばそれだけの効がある。また五十錢は五十錢の品物、一圓なら一圓の品物、それごの價が定まつてゐて、謂は、賣り物買ひ物の勘定づくで、萬事を扱ふのが世の通常である。これを體好くいへば、所謂權利義務であります。

しかしこの權利義務の勘定づくの話が、うち切れてあるのは、たゞほんごうの親子のあひだのごことだけである。「哀々たる父母

われを生みて劬勞す」たゞ何ごいふことはない。子を見れば可愛いの情がおこり、寒からうごいふては着せ、腹が空つたであらうごいふては、乳房を與へる。夜中に睡たいのは、親も子も同じことであるのに、子を起して廁へゆく子は眠いやら寒いやらで泣き出す、親は子よりも早く目を覺ましてゐる。むしろ本當には眠らずにゐるのであります。

私ごも、今日はごうやら一人前だごいつて、一人で育つたやうに思つてゐるが、一念この父母の大恩に思ひ及ぶ時は何ごも申しやうがない。もし親に少しでも權利ごか義務ごかいふ考へがあつたなら、今日の體はない。育つべき價值のない、棄て、置けば、死ぬのにきまつておる赤ん坊が一人前になられたのは、權利も義

務も忘れられたる眞心一杯の親のはたらきである。

まことに私共はその赤ん坊であります。只今生一世のここではない。過去幾世の前から、生れかはり死にかはりして迷つて來た孤兒である。そうして、世の波に一人立ちで行くここが出来るかごいふに自分では出来るつもりであつたが、實際まるで何ごも方角のつかぬ孤兒である。

是だけ働け、賃を與へる。是だけ、錢をだせ、泊めてやらうごいふ人は少くはない。それご同様に、善根功德を勵め、戒行を守れ、然らばたすけてやらうごいふ教は澤山ある。眼のまへにある。

然しごくに、父ごいはれ、母ごいはるる人は、天にも地にもた

つた一人づつである。わが御親阿彌陀如來は母である。心配するな、そのまゝ引き受けるこて待ちうけてゐなさる。他を向くな、われを頼めご仰せられてある。我々の子兒の時から耳に響いてある南無阿彌陀佛の御名は、丁度それではないか。考へるここはいらぬ。勘定づくでない。一向に信じて、その御名を稱へさしていたゞくのである。ごうも私共親のある子は仕合はせである。(明治四十二年五月一日)

### 信は第一着なり

法を聞くに就いて、たゞぼんやりと、席に列なりてゐる人があ

る。ごうか一度は、心をこゝめて求めたいものである。

又心を注めても、前後左右、種々なことを、氣にかけて、信仰に入りかぬ人が多い。或は一念の信仰と、其の後の相續とを混亂し、或は信後に於ても、事の本末を取りちがへて、種々心配するものがある。それは外ではない。聞くべき要點、すなはち求めてゐる目當を見出さぬからである。

親鸞聖人は「往生淨土のためには、たゞ信心をさきこす。そのほかをばかへりみざるなり」と仰せられて、今法を聞かうとする人は、信仰をうる、ご云ふことを、第一着にせねばならぬ。即ち一念の信心を得るごいふ事が、最も大切である。この事の定まらぬ前は、信を得てからの事などは、取り越して心配すべきでな

い。今は信仰そのものが目當であることを忘れてならぬのである。

そこで先づ、信仰を得やうと云ふに就いては、何物にもかへられぬ、一大事件である。覺悟を定め、如何なることを聞くのであるか、目安をつけるのが大切である。

しかし何にも、むづかしい事ではない。私共の大事である此の要件を、如來は、已に久しい昔から、深く御心配くだされて、私共の心の奥の奥までおしらせられた上に、唯一の御名南無阿彌陀佛を御成就くださったのである。

「往生ほごの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず。ひこそすちに、如來にまかせたてまつるべし。これを他力に歸したる信心

發得の行者と云ふなり」親鸞聖人の仰せがある。

如來の心はたゞ、一切の恐れあるものの爲めに大安を爲さんご云ふより外はない。この實心こそ私共の、安心の本源である。動かぬものは、まごこの外にはない。然るに私共の心は、怪しいものである。有り體に云へば、まごご云ふべきものは無い。この事がわかつたなら、如來の御名は、久しい已前より「そのまゝ、我をたのめ、必ず救くる」ご名のりて下されてある。やるせの無い御喚び聲である。この御名一で救けられる身となる。

「人はみな、佛の心を知りたいと思ふておるが、佛が已に、私共の心を知り給へることを知らぬ」ご、明信寺ご云ふ人が申された。實にそうである。この如來の御智慧が、直ぐに御名である。

御光明である。私共の逃げ場は無い。これ程までの深き御意であつたか、ご飛び立つ思の歸命の一念の起こる時、今までの迷は、サラリと消えはて、如來大悲の光明の天地に浮び出づるのである。

(明治四十二年六月一日)

### 芥子ばかりの地

今日は不思議な御縁で、皆様と法縁を結ばせて頂くことになりました。で、因縁の尊きことを、暫く御話致そうかと思ひます。先ず佛法の中で、因縁因果の理の、何時も變らぬことを申すが、近く我々が此の席へ集まりましたのは、ごう云ふ由であらうか。

常に佛の御苦勞下されたのは、容易でなかつたご承はりては居れども、ごうも適切に我身に感ぜぬのが多いやうである。御開山聖人は行卷に、元照律師の言を引いて、「塵點劫をへて、濟衆の仁をいだけり、芥子ばかりの地も、御身を捨てたまはぬ處に非るはなし」、ごある。斯うして座りて居る處も、行いて來た處も、氣まゝに寢起をする處も、皆一度は御佛の生血の流れた處である、ご申す仰せである。

魚類ごなつて食はれたり、蠶ごなつて煮られたり、怨敵ごなつて打れたりなされたごもある。或は又た親や子、兄弟や朋友等種々のものになつて、縁を付けて下されたのである。これが御佛の助けずばおかぬごある、御念力の御働きであつて、私共の常に

輕々に思ふて居る、宿善の本源である。

私共今日迄、還相廻向と云へば、私共が淨土へ参りて得たてまつる利益ごばかり思ふて居た、が先年より計らずも、「法華經」普門品を拜讀する御縁が出来た。此經の中程に、「此の沙婆世界の人々を濟度するが爲めに、或は佛身を現じ、或は羅漢の身を現じ、或は梵天となり帝釋となり、國王となり大臣となり、僧となり尼となり、學者となり人の妻となり、或は童男童女となり、其外惡魔ごもなり、修羅ごもなり、種々の身を現じて、我々に近付て、遂に佛道へ引き入れ給ふ、」と云ふことが説いてある。之が所謂觀音の三十三身である。

此の御苦勞は、餘の御方でない「彌陀初會の聖衆は、算數のおよぶごごぞなき」彌陀如來の佛に成りたまひし最初に参られたる方々は、數知れぬ澤山の聖衆であらせられた。其の聖衆は皆「普賢の徳に歸してこそ、穢國に必ず化するなれ」如來の大命により、此の穢國にかへりて、それごとく我々を導いて下さるのである。其の上首の御方は觀音勢至等で「御和讃」に「觀音勢至もろごもに、慈光世界を照耀し有縁を度して暫くも、休息あるごごなかりけり」大悲やるせなく、如來ご共に種々に善巧方便して、私共をはぐ、んで下された相が三十三身である。觀音様ばかりでない、勢至菩薩も、文殊菩薩も、我々より先に淨土へ参られてある方々は、皆同じやうに御苦勞下されてある。

して見るご近く私共の眼の前に、如何なる處に此の御苦勞が現

はれてあるか分らぬ。之を思ふご中々浮かくしては居られぬ。蓮如上人は「宿善めでたしご云ふは悪し、御一流には宿善ありがたしご申すがよく候由、仰せられ候」ご「御聞書」に出てある。此の御席で皆様ご會ふのは、今始めてあらうが、如來の御手許で言へば、幾たびごなく御引合せを受けたのである。

世間の事で寄り合ふのも、元より深い因縁のあることですが、今日如來の御前に跪き、如來の大悲を味ふ身の上ごなつたご云ふ、此の御席の開かるゝには、不可思議の因縁の結び付いてあるここに相違ない。

如來は、無量の光明で、碍りなく照したまふご共に、無量の壽命の御用意がある。皆私共を助くる御本願の顯れてある。此の御

席が直ぐに如來の御慈悲のはたらきである。ご感ぜすには居られぬのである。

已に如來の光明ご壽命ごが、限りなくはたらいて、私共を淨土へ導いて下さるごが分つて見るご、一度この御法の席で逢ふた人々は、來世でなければ來々世、それで無ければ又其の次生、十生の末か、百生の末か、幾千萬生迷ふごも、何時かは必ず御淨土で、對面せずには居られぬが、私共の身の上である。これが如來の御本願で、不可思議の強き縁に引き寄せられて居る。御互に、只事では有りませぬ。(明治四十二年七月一日)

### 平生の所作に就いて

平生の所作について、少しく注意を怠るゝ、何ごなく心苦し  
く、先のつかへたやうな感じのすることがある。之れは私ばかり  
ではあるまいと思ふ。道理や理屈は、ごうでも云はるゝが、實際  
の事柄には、少しの猶豫をも許さぬ。たごひ人は許すかも知れぬ  
が、自分の精神がをちつかぬ。

ソコで私には、是非ごもせねばならぬごご、ドウでも好いご  
ご、を見別して、急を要する方から、手を下すやうに心掛け、出  
來うるかぎり、仕事を簡約にするのが好いと思ふ。

全體に心苦しご言ふごごは、仕事が停滯るより起るのが多いや

うである。即ち爲ねばならぬごごを爲すにをくから、氣が重くな  
る。丁度、食事を喰ひすぎたやうな感じがする。

これに就いては、萬事に堪能なる人は兎も角、通常我々のやう  
なものは、成るべく仕事を増さぬやうにせねばならぬ。人の依頼  
であつても、之れは出來さうにないご云ふものは、斷然ご引き受  
けぬやうにするのが肝要である。

然るに、うかごして、無造作に引受けて置いて、後に之れは困  
つたごごをしたご思ふごごがしばゝある。ソコでたごひ其場で  
は、謝はりにくゝても、後に約束をたがへたり、迷惑をするより  
は、寧ろ、出來ぬごごなら、「出來ぬ」ご明言する方が好いと思ふ。  
廣瀬淡窓の『自新録』なごにも、矢張りかう云ふごごを申され



てあつたやうに思ふ、淡窓も、自己の修養には餘程、心を用ゐられたと見える。

私には、支那の古聖人帝舜は、陶器を作る仲間になつた時は、其の業を正直につとめ、村長のやうな職になつた時は、安んじて其職につくし、又帝堯に迎へられては、進んで王位に登りて、國を治められたと承はつて居る。其の位の高下や、職業の大小にかゝはらず、常に安んじて忠實に其勤めを怠らず、忽せにせられな

んだと云ふことは、誠に尊い話である。別けて、眞實に、佛の恩徳を喜ぶ身は、常に佛の前に在りて、佛ごにもに起き、佛ごにもに臥し、死しては佛の光明に送られて、浄土へ參るべき廣大なる仕合せを蒙つて居る身、何ぞて其の日其

の日の仕事を忽せにする事が出来やう。

始に述べたことは甚だ消極主義のやうであるが、たゞ自分の盡くさねばならぬことを、忠實につとめたいと思ふばかりである。帝舜の話によりて、好く味ふて、頂きたいのであります。

(明治四十二年七月一日)

### 自然の徳

御佛の限りのないまごころ心を頂くだけで、私共の用事が、何もかも調ふのである。それに、ごふかするご、自分ではからひだてをして、信心をこしらへるやふに、憂慮することがある。いかに

も勿體ないことである。

只佛智の不思議である。たすかるべきものでない私共が、只信ずる一つでたすかる。それが事實である。佛智の不思議、誓願の不思議、名號の不思議、みなこれ、み佛の御はからひである。

御佛の御はからひは、ごうも不思議である。蓮如上人は「信治定の人、誰によらず、まず見ればたふさくなり候。是れその人のたふさきにあらず。佛智をえらるゝがゆへなれば、いよ／＼佛智のありがたきはごを存すべきことなり」と仰せられた。佛智の入りみちたる信心には、不思議の徳がある。

熱田の西南一里ばかりの村に、友藏と言ふ信者があつた。一昨年頃、四十一歳で亡くなられた。常に佛智の不思議を信じて、餘

念なく、念佛を稱へ、妻子ごごもに、カン／＼ご仕事に精出し、正直に一生を送られた。

或る時、野菜を賣るごて、十町ばかり南の海邊、大手ご云ふ處へ出た、同村の某、大手で澤山の石を拾ふて歸る途中、不圖友藏の來るのを見て、石を殘らず、ソコに捨て、歸つた。

それを見て居た人が、某に「お前ナゼ石をすてたのだ」と尋ねるご、「あの正直な友藏が來るのを見て、何ごなく、恥かしくなつたから」と答へたさふである。

「染香人のその身には、香氣あるがごごくなり」念佛の徳が、これほご廣大であるかは、なか／＼はかり知ることには出來ぬ。大和の清九郎は、少い時、隣家の蓆を盗みて、雨をしのがうごしたご

ごもあるのに、信心を得て後は、留守中、菜種を賣りて得た七匁の金を盗まれてさへも、「幸に盗人を、無手に歸へさなんて、好かつた」と喜ぶやうになつた、ご承りて居る。

私共は常に、自分が好いものごならふ、ご力むのであるが、有り體に云へば、一も好いごはない。「人間は、鬼は居ぬごもいふべきに、こころの間は、何ご答へる」と矢部駿河守の申された通りである。唯、佛ばかりが眞實であらせらるゝ。汚れはてたる私共も、この佛を信ずるによりて、「彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ」のである。「わろからんにつけても、いよく願力をあほぎまいらせば、自然のこごはりにて、柔和忍辱のこゝろもいごくべし」の仰せがある。(明治四十二年十月一日)

## 安心小話

### ◎腹帯は要らぬ

日露の戦役の時、三河十八聯隊に、豆谷丑松、同宗吉ご云へる兄弟の兵士あり。宗吉は遼陽の役に負傷して、後死去。丑松は奉天の役に戦死した。二名ごも、親類より、千人結の腹巻を、ご強ひたれごも、更に受けす、「好意は有りがたひが、吾は夙に阿彌陀如来の心光の中におさめごられ、諸神諸佛の御護を受けて居る身なれば、今は其の要なし」と申されたご。

### ◎呼ばぬ時ごも

右丑松、戦地よりの書信には、餘の事なく、唯左の三首の歌を

書きたるばかりであつた。

國の恩

夢の世は、御國のために、軍事、

さむればうれし、彌陀の淨土ぞ。

佛の恩

佛恩を、思ひ出しても、出さぬとも、

よばらぬ時も、親ははなれず。

玄海を、無難に越さず御用船、

浪荒立てば、船をたよりに。

「あらたふこや南无阿彌陀佛」

◎親は側に居たのです

同じく丑松、三十八年二月十八日に出だしたる最後の書信の中に「このころは月夜です。陣中、月を見るにつけ

たのませて、たのまれたまふ、彌陀なれば、

たのむ心も、我ご起らし。

この歌を思ひうかべ、慈悲深き親様の名を呼び、往生一定ご喜び又母のふところ寝て居る子供が、怖い夢を見て、お母さんくご親を呼ぶ。其の呼ばぬ先から、親はソバに居たのです。私が念佛稱へるから守るの、呼ぶから来るの、ご云ふやうな親様ではない。忘れてあるごきに、ソバをはなれず守りたまふごは。アキレ夕親様でないか。こんな親切な親様があれば、未來は大丈夫です。淨土の使は彈丸です。

●親の里は二つある

宗吉出征の時、下宿の家に、密封の一書をのこし、「我戦死せば、之を父に手渡ししてくれよ」と托しおきし封書の表面には、三十七年六月二十一日、釋善徳の遺髪ご書き、其の中に、戦死の知らせあらば、この髪にて、葬式下され度。生きたら故郷の親許、死なば浄土の親許。南無阿彌陀佛。

父上様。

ご書いてあつた。今滿洲の守備隊におる大矢某の書信に、

我が歸る親の古里二つあり

ごちらへかへるもさしつかへなし

ご記されたるご同一味である。(明治四十二年十二月一日)

一月一日の箴

毎年お正月になるご、「今年こそは」と思ふのであるが、いつの間やら、メチャクになつて、何をするご云ふごなく、一年を暮してしまふ。而して、年末になるご、あつたらぬごであった、來年は是非に斯んなごではならぬご、シコロをしむ。が「來年はくごて、暮れにけり」來る年も又本の通り、グズグズ暮してしまふのが、年々のやりそこないである。

「歴史は繰りかへす」と云ふが、國家や社會の大きなごばかりではない。我々日々のごが、やはりそれである。即ち小さき一人々々の、年々の行き方が、大きくなりて、社會や國家の大なる

歴史となつて顯はるゝまでゝある。して見れば、先づ自分々々の足元から、氣を附けねばならぬのは、勿論のことである。

こんなことは、お互に知り切つて居る。知りつゝ、行りそこなひの歴史を繰りかへすのであるから、深く注意せねばならぬことである。ソコで私には、某師の家憲として居らるゝ云ふ三ヶ條を守りたいと思ふ。

一、をんをわすれぬこと

二、うそをいはぬこと

三、かげひなたなくはたらくこと

意に、佛の恩、師の恩、親の恩、社會の恩を忘れず、口に、虚言を言はず、身に蔭日向なしに自分の職務を努むること言ふので、身

口意の三業にわたりて、好い掟である。是非守りたいものである。これに赤尾の道宗といふ信者の申された。

一日のたしなみは、朝、勤行にかゝさじごたしなめ。

一月のたしなみは、近き所、御開山様の御座候ふところへ、

参るべしごたしなめ。

一年のたしなみは、御本寺へ参るべしごたしなむべし。

といふことを、加へて守りたいものである。これは前の三ヶ條の第一の「恩を忘れぬこと」と云ふ中に、こもりては居るが、實行上、特に加へたのである。要は、少くとも一月に一回位は、寺か道場へ参り、大悲の尊容を拜み、尊き法話を聞くのである。

其の上、モ一一つ、ごうか如來よりたまはりたる念佛の御相續

を怠たらぬやうにしたい。これが無ければ、一切の仕事に力がな  
い。つまり無駄事になる。人間に生れた目的は、是れ一つで達せ  
られたのであると申しても好い。眞の仕合は是れである。

「佛願を信ずること、ろまことなれば、稱名もおこたらず。稱名お  
こたらざれば、信心もいよく増長すべし」如來の光明は、現に  
我が身の上に、みなぎつて居る、光明に照らされ護られてある信  
仰を得ねば、念佛は稱へられぬ。今は限りのない壽命をうべき安  
樂の國をのぞみつゝ、念佛の中で、萬事をイソゝゝと行つて行  
く。眞の仕合は是を得たのである。(明治四十三年一月一日)

質 疑  
應 答

歸 命 の 一 念

(前略)頃日は、御多用中にも拘はらず、御懇篤なる御教示を蒙り  
辱けなく鳴謝し奉り候。然るに阿彌陀様の存在と云ふことに付い  
ては、最早疑を入るべき餘地これ無く相成り候へども、一心一向  
に歸命し奉ること能はず。是れ必定、私の邪見驕慢の計ひ心を以  
て佛智不思議力を思議する故と、種々思念候へども、一向に歸命  
する心おこらず候。就ては誠に恐縮の至に御座候へども、此の間  
題解決して、廻心懺悔し奉らずば、ごてもく日夜の苦悶に堪え  
がたく、實に困却仕り居り候ふ間、何卒今一度、私の迷心慢心を

打ち破りに預かり度く、かねて御承知の通りの自力執着心の強き  
ここ、國中第一番の私に付き、何卒宜く御取計相成候ふ様、此段  
失禮をも省みず懇願し奉り候。敬白

正月七日

野田次郎

住田先生様

病氣の重き中に、かやうに切なる御尋ねを申し越された。依て左  
の如く御返事を認めて送りましたことである。

拜復。頃日は、御病中失禮仕り候。御尋の件一往御尤に存せ  
られ候へども、自分で自力の執心を破らんご力むのは、我が  
手足にて地を離れんごするが如く、決して出来るものに非ず  
候。私共の「これではく」ご後ひざりするのを、大悲の御

親は「それでもく」ご向かひたまへる御すがたが、南無阿  
彌陀佛の御名に候。

一念が無ければゆかぬ、ご自ら力むのも、矢張り自力の執心  
に候ふべし。去ればこそ、いつまで立つても、安心出来ぬの  
である。今は左右ではない「是非ごにもすくはん」ごて長々  
の御苦勞を重ねたまひ、たすかるべき値打の無ひ私を、すく  
はんご誓ひたまひて、其の大願成就の御満足なる御呼び聲  
が「そのまゝ、我をたのめ、我にすがれ、必ず守る、引き受く  
るぞ」ごの切なる御言ごならせたまへるごに候。

私共は、此の御名あり、この御呼び聲を聞くごを得た。幸  
榮是れに加ふべきものは無い。たゞ念佛して彌陀にたすけら



れまいらすべしと信じたる一念に、佛智の不思議として、必ず決定の喜びを與へたまふ。是が信の一念に候ふ。喜びも決定も、みな願力をたのみ、佛智を信ずる處に、自然に與へらるゝ徳に候ふ。喜びや決定が、信には非ず、信の用きに候。何卒、御身の枕邊に立ちて、晝夜待ちたまへる大悲の御親の在ます事に候へば、たゞく御念佛相續なされ度く、念じ入り候ふ。大悲の御親は、何よりも念佛の聲を聞くここを御喜びなさるゝここに候ふ。

右篤ご御味下され候ふ上、尙御不審あらば、御尋ね下され度く候ふ。匆々

一月八日夕

智 見

野田次郎様

一度も南無阿彌陀佛といふ人の

彌陀の御國に生れぬはなし

(蓮如上人御謠曲中の言葉) (明治四十三年二月一日)

質疑  
應答

宿善到來の仕合せ

病中の或る人、常に大事をかけて、居らるれども、「信ずると言ふここが出来ぬ」と心配し、「我が身はまだ宿善の到らぬのであらふか」と申す質問を頂いた。依りて左の通り御返事を呈しおきました。(三月二十二日の朝)

宿善到來の仕合せ

拜復。御痛切なるお尋、まことに同情の念にたえず候。然るに貴問の「宿善によりて、信をうるここゆへ、時節を待つ」と申すことは、教示の智知の申したまふことにて、教を受くる人は、たゞ平心にお受けする外これなきこと、存じ候。『大經』に宿世見諸佛、樂聽如是教と説きてある。貴君には、已にお求めになる心あり。これ宿善到来せること、存じ候ふ。願くば、分別することをやめて、祖師聖人の仰せを、平心にお納受相成るべきこと、最も肝要と存じ候。

私共如何程考へても、それだけのことにて、一步も進むことは出来ず、只前業の風にまかせて流轉することに候。平生「求道」を御覽のことに候へば、何も申し上ぐべき餘地これなく候へども

小生思ふには、たすけたまへる佛の仰せを、そのまゝお受けするだけの用意なくては、かなわぬことに候。

私がごうするご云ふことではない。佛の一心にすがれごよびたまへる此の仰せを、「一子の如く私を思召す親心」とお受け申すこと。これなくては、佛力は我が物とはならず候。

親は私の爲めに、常にありたけの注意を加へらるれども、私が親の親切の限りなきことに、氣附かずしては、親の親切は、我が物とはならず候。今は南無阿彌陀佛のお謂れ「そのまゝ、我にすがれ必ず守るぞこの不可思議の喚聲を聞く、何たる廣大なる思召であるぞ」といたゞくばかりで、満々大悲の心水が溢れたまふことに候。

平心に聞かねばならぬ。自心に型をこしらへて「ごうもゆかぬ」ご申すのではない、空手で向ふのである。而して罪の深い我が身を特に引き受くるぞこの仰せゆへ、引き込むのではない。親の親切を無にせぬのである。親の親切に對して、親を安心させ申すのである。

ごうぞ、このことを深くお味ひ下され、特に「歎異鈔」を御熟讀下され度く候。尚御不審もあらば重ねてお尋ね下され度く候。

たすくるぞ、たのめの母の喚聲の

今ぞきこえし南無阿彌陀佛

香樹院師

(明治四十三年五月一日)

### 時機相應の法

只今の時は、眞念佛の、ますく繁昌の時となつたようにも思ひ、又非常に衰へたかごも思はれることがある。

道理々屈をこねまはして、これが眞宗の安心のやうに思ひ、佛法者ぶり後世者ぶるのが、一宗の名譽のやうに心得たり。形をかざるここにはかり力を入れて居るのを見るこ、是れでは、宗門の行く末はご心配して見るこがある。

よくよく考へて見るこ、皆小さな心から彼是ご思ふので、實は我々のやうな凡夫の知つたこではない。のみならず、矢張、破れた障子の穴から人の破れ障子を笑ふので、まここに慚愧に

たえぬ次第である。

然かるに本年四月十一日、大谷派本願寺の前々住上人眞無量院十七回忌の御法事に参詣の途すがら、親友三名ご大津に下車し、汽船にて、湖上を辛崎へ泊り、上阪本に一泊して、翌日、比叡山三塔を隈なく巡詣して、七百年前の祖恩を感謝したことであった。

叡山へは、明治二十年の秋から、七八回も参詣して居るが、今回は特に他力眞宗の時機相應ご云ふことを感じさせていたゞいたやうに思ふ。山は元より天台の靈地であり、女人禁制の結界の場處である。又七百年前には、元祖法然聖人や、我が親鸞聖人の御勸化を喜ばぬ人が多く。四百年前には、蓮如上人の大谷本願寺

を、焼き拂ふたこともあつた、ご承はりて居る。

其れに、今日は、山上、到る處で、親鸞聖人や法然聖人の御徳をたゞへざるはなく、別けて我が聖人二十年御修學の御場處ご傳へて居る無動寺谷の大乗院では、我が聖人の御木像を安置して、毎年十月十日頃、報恩講を執行して、其の説教は本願寺より出張することゝなつて居る。

「像末五濁の世となりて、釋迦の遺教かくれしむ。彌陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかりなり」叡山の隅々まで、我が聖人の御徳が顯はれ、他力念佛を何處はばかりなく弘めらるゝようになりたご云ふは、まことに不可思議である。

法然聖人は「龍樹天親の二菩薩が、淨土往生の御先達をして下さ

れたところが、何よりありがたい」ご喜ばせられたところがある。龍樹は叡山天台宗の祖師、天親は南都法相宗の祖師で、何れもみな像法の時に出世なされたる高德である。「像法の時の智人も、自力の諸教をさしおきて、時機相應の法なれば、念佛門にぞいりたまふ」全く如來御本願の現はれである。さればこそ、此のお山で男子も女子も、祖恩を懐ふて上ぼり、到る處で、念佛を聞くことが出来るやうになつたのである。まことに眞宗は、ますます御繁昌あらせらるゝところであります。

蓮如上人御詠

ぎけばなほ我はからいのつきはてゝ、

みだのたすくる法の尊さ

(明治四十三年六月一日)

質疑  
應答

本願力廻向

(御尋の要點)、は生れ付き三毒の煩惱ふかく、我が身ながらに愛相のつきたものを、此のまゝながら御たすけ下さるは大悲の親様ばかり。ご承はれば、領解聽聞の色目も見ず、信心安心のすがたも要にたてず。たのむ一ツで御助けくださるごは、御慈悲の深い親様御一佛ご、明にいたゞきました云々

石狩 辻野五右衛門

御尋の文は、大層長いが、安心の要は、右の言に收まつてあるやうであつた。言の上は、いかにも確ご如來の願力が分かり、一

ごすぢにたのみ奉られた心中のやうである。併しお互に、よく氣を付けねばならぬのは、願力の趣が、分かつたやうでも、實には中々ハツキリさいたゞけかねるものである。いつのまにやら、自分の機をながめて心配が起こり、こんなことではと、ぐらつき出す。ソコでいつもお話に出るごとであるが、我が手元の善悪は、本より間に合はぬ、役に立たぬものである、ご知りつゝ、間に合はせたくてならぬ。

佛は、私共の心の有りさまを、よくくしらべて下されて、ごうしても、しようのないものご見込を付け、ごの佛も神も、兎ても手に合はぬご、すてさせられたのを、萬善も萬行も私共になりかはりて成就して、そのまゝ我をたのため、必ずたすくるぞこの、

よび聲が南無阿彌陀佛の御名であらせらるゝ。

然れば、此の御本願がましませばこそ、只不思議の佛智を信じて、おたすけを決定させていたゞくのである。然るに、是れを軽いごに思い、只の只である、はいご受けるだけであるご、きめこんで、しかご如來をたのまずに居る人がある。それは誠にあふない。

いかにも只の只であらう。去りながら私共は、たすかられぬものである。罪の深い、障の多い、何ごもならぬ仕様のないものを、それを本ごたすけんご、思召さるゝ御本願があればこそ、このまゝたすけていたゞくごが、出来るやうになつた、ご云ふごを味はねばならぬ。

只の只であるが、常の只ではない。佛の本願、南無阿彌陀佛のおいはれて、證を開く因を賜はるのである。こゝが尊い處である。

今は只、此のおいはれを、すなほにいたゞいて、しかゝ如來をたのみ、念佛申すのである。(明治四十三年七月一日)

### 佛は大醫王なり

(北見國鬼脇の今城義郎氏(二十一歳)の四箇條の御尋に就いて)  
御尋の事、何れも、眞面目で、まことに同情にたえませぬ。お互に今日まで、迷を重ねて來たのは、「我」が本であるこゝ、天親菩薩も仰せられてある。この「我」又、他力の御本願に向ふては、自力の執心ごあらはるゝのである。

ソコで他力が分かつたやうでも、いつの間やら、自力が頭を出だして、種々に、自分ご自分にもがくのである。喜ばれぬ、尊ごまれぬ、好い心が出でぬご云ふ。皆お互ひの昔からの自力根性である。お尋ねは、四ヶ條になつてある。

一、喜ばれる信心、そうでないのは、未決定かと思はれるのは、一往御尤のやうなれども、これは、よく思はねばならぬ。信をうれば、喜ばれましょう。が、喜ぶのが信ではない。蓮如上人は「信をば得ずして、喜び候はんご思ふごこゝ、たごへば糸にて、物をぬふに、あごをそのまゝにてぬへば、ぬけ候ふやうに、悦び

候はんごも、信をえぬは、いたずらごごなり。よろこべたすけたまはんご仰せられ候ふごごにてもなく候。たのむ衆生をたすけたまはんごの本願にて候」ご仰せられてある。何よりも先づ、如來の御本願を承はらねばならぬ。「そのまゝ、我をたのため、必ずたすくる」ごの仰せである。一すちにたのみて、決定し、うらくご念佛を申す。この外はありませぬ。

親は尊ひ。親が親ご知られた時、決定する。喜も出る。親が知られて、たのまれたは、信である。喜びは、其の決定の信に具はる徳である。喜の有る無しは、今の入用ではない。親を信するごが尤も必要である。ごうぞこれをよく味ふて下さい。

二、船に乗つたやうな氣になられぬごのお尋。

子は親を忘れて居る。親は子を忘れる暇はない。如來をたのみ、如來にすがる身は、我が手元の思ひをながめるのは、無用であるばかりではない。まことに恐れ入らねばならぬ。私共の我がまゝに如來にそむき、如來をうたがふて來た間も、御目を放さず、育み守りて下だされたのである。親なればこそ、好うこそは、かくまでに御養育くだされたぞご、いたゞかせてもらうのである。

三河の七三郎が、久しく後生を苦にして、祖師聖人の御舊跡を巡拜し、歸り路、美濃の或る家に泊まつた。其の家の婆さんが、大層、喜んで居るので、七三郎「私は頂かれぬが、ごうしたら好いだらう」ご尋ねたら、婆さんは、「お前の昨夜から稱へて居る南無阿彌陀佛が、やるせない大悲のお喚び聲だが分からねか」ご云



ふた、この一言に有りがたい信者なられたのである。

第三第四のお尋は、後生が苦になつて、他の新聞なごよりは佛法の本をよみたくなるこの事。まここに一大事のお心懸。隨喜にたえませぬ。

香嚴院講師は、大病で、嚙語を言ふて居る間は自分の病氣の重きことも、苦しいことも忘れて居る。少々熱度も降り、病が治りかけてから、始めて苦を覺ゆるやうになる。是れも醫者のお蔭で藥の功が顯はれたのである。お互に、佛も法も知らぬ間は、何とも無かつたのが、後生大事と氣がついてから、種々の事が苦になり、何んもなく捨て、おかれぬやうになつたのは、大悲の御方便が我が身に廻はつて下されたのである。おろそかに心得ては

ならぬぞ」ご申された「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり」何もかも、久遠劫より久しき間、いさゝかもお手ゆるみのない、大悲の御親切の顯れである。この事を承はるお方は、まここに仕合せであります。

(明治四十三年八月一日)

### 法然聖人の化他

一、我が法然聖人、四十三の御歳、始めて彌陀の本願を信じたまひてからは、『世の中の人の心にかはりけり、世をいごふこて、山を出づれば』叡山の黒谷を出で、吉水の邊に草菴をしつらひ、念佛を事とし、尋ね來る人々には、たゞ自信のまゝを傳へさせられた。

二、御勸化の場所は、僅に京都附近だけで、其の外へは出でたまはぬ。或る夜、白河の二階坊で法を談じたまひしに、物を盗まうこて椽の下にかくれて居た攝津の耳四郎、はからず尊き御法を聴聞した。聖人いつもの通り『凡夫出離の要道、淨土の一門念佛

の一行にしくはなし。その機を云へば十惡五逆、四重謗法、闡提、破戒邪見等の罪人その行を論ずれば、十聲一聲、いかなる嬰兒も稱へつべし、その信を云へば、一念十念、いかなる愚者も發しつべし。たゞこの本願にまうあひ、南無阿彌陀佛といへる名號をきゝえてんもの、若不生者のちかひのゆへに、彌陀如來遍照の光明をもて、これを攝取してすてたまはず。罪おもく、障ふかく、心くらく、解すくなからんにつけても、いよく佛の本願をあふぐべし。そのゆへは彌陀の本誓は、もご凡夫のためにして、聖人のためにあらずと云へる文によりてなり。あふぐべし信ずべし』なごゝみゝちかに、こゝろえやすくのたまへば、耳四郎は、つるに他力信心の行者となつた。

三、或る時、院宣によりて、後白河法皇の御殿へまいりて、「往生要集」を講じたまへるに「それ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤たれか歸せざらん」と讀み上げたまへば、法皇始め、公卿侍臣みな、今更の如く覺えて、尊みたまひ、藤原の隆信に仰せて、聖人の眞影をうつさせ、蓮華王院の寶藏におさめしめられた。

四、身分を云へば、一天萬乗の御方より、大悪人耳四郎まで、同く聖人の勸化を喜び。智慧を云へば、またさまざまである。隨蓮のやうな無學の人もあれば、聖覺、信空、さては我が親鸞聖人のやうな方もある。

五、隨蓮は「故聖人法然は念佛は様なきを様ごす、たゞひと

へに佛語を信じて、念佛すれば往生するなりと仰せられき」と信じ。親鸞聖人は「たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひと法然聖人の仰せをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり」と喜ばれてあつた。

六、熊谷直實や宇都の宮彌三郎のやうな武人も同く仰せを喜んだ。法然聖人の御勸化の盛んなことは、殆んど想像の外である。能く々時機に相應して居たに違ひない。

七、本師源空世に出て、弘願の一乗ひろめつゝ、日本一洲こころく、淨土の機縁あらはれぬ。智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふ。

諸佛方便さきいたり、源空ひじりごしめしつゝ、  
 無上の信心教てぞ、涅槃のかごをばひらきける。  
 眞の知識にあふごは、難がなかになをかたし、  
 流轉輪廻のきはなきは、疑情の障にしくぞなき。  
 ごは、親鸞聖人が法然聖人をほめたまへる讚文である。

(明治四十三年四月一日)

如來の本懷即ち我が素懷

「大無量壽經」を以て、釋尊一代の根本經であるごも、出世本懷を顯はされたる經であるごも申してある。此の事をたゞ教義上の

問題として。冷靜に攻究する時は兎も角なれごも、私共の精神上に於ける根本問題として味ふ時は、實に言ふべからざる森嚴の靈氣に打たるゝのであります。

大聖釋尊出世の本懷、たゞ我等蠢々たる一切の衆生を救はんがためである。我等は今生一世、何等の意義も無く、周圍の事情に追ひ立てられて、醉生夢死せんごしつゝある。此に大聖、久遠の大悲願力に乗じて出世したまひ、隨類應同、種々の方便を設けて、一代八十年の化儀を莊嚴されたのである。

釋尊は、「八千返此の世へ往返した」ご自ら仰せられた。此は輕忽のここではない。私共の迷夢が容易に覺めぬから、或は奈落の底に沈み、或は人天の樂果にふけりつゝある間、少しも大悲を

すてずして今日まで附き添ふて、常樂の妙境に伴ひ還らんと思召されたる事實を申すのである。

釋尊の大悲の深遠なることを聞くと共に、私共の迷の長きことが、ますます明に知られる。そうして釋尊は、又本佛阿彌陀如來の本願を以て、私共に向はせられてある。一代の説教何れも尊い廣大なる法門である。去れど皆智慧門の法であつて、散動の心を息めよ。善を修せよ。其れを以て大覺の境に進めど勵まされてある。尊いことは尊い。高いことは高い。私共のやうに我情の強いものは。幾度と無く、此道に進まうと決心はしたのである。が其のたびごとに、つまづいた。

我が親鸞聖人は、「三恒河沙ノ諸佛ノ、出世ノミモトニアリシト

キ、大菩提心オコセドモ、自力カナハデ流轉セリ」ご示された。

この爲めに久遠の本佛たる阿彌陀如來は、念佛の本願を立て、別に他力救濟の一道を開かせられて、「一心に念ぜよ、必ず守らん」ご喚びたまふ。この本願、即ち釋尊出世の本意となりて、「大無量壽經」に説かれたのである。生々、世々、八千返の往返は、たゞこの大道を顯はさんが爲めである。本佛阿彌陀如來、現在の釋尊の本懷たるのみならず、代々の聖賢の示されたる所も亦、此の心の外はあらせられぬ。

私共は迷夢より覺めなんだ。去れど此の本願を聞かずしては、人生の行路、何等の意義を見ごむることは出来ぬ。人生一切の事實は、全く夢幻のやうである。種々ご理屈を考へれば、説明もあ

るかなれども、畢竟の歸趣となるものは、一もない。たゞ如來の本願、こればかりである。

この事を聞くを得た。即ち我等の本意をこげたのである。そのまゝ、釋尊出世の本懐にかなひ、阿彌陀如來の本願にかなふのである。只私共の信仰其の者が、あらゆる聖賢の本意である。「良に勸すでに恒沙の勸なれば、信亦恒沙の信なり」一念の信樂開發、實に甚大久遠の本願の徹到したのである。此一念、私共の足實地を踏むの始めである。其の意義の深遠なる、到底言語の及ぶ所ではない。

「一念とは、斯れ信樂開發の時尅の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰すなり」とは、この不可思議の信念の讚嘆であります。

(天正二年一月十五日)

### 眞宗の源流

親鸞聖人御配所の遺跡たる越後の國分、竹の内御草菴に於て、七月二十九日より二週間「御傳鈔」を開講するここ、なつて、此地へ參り、日々七百年前聖人の聞き給ひし居多ヶ濱の風浪を耳にし、聖人の御目に映じたる國分寺や、春日山等を眺め、或は聖人の御用水たりしと云へる養爺清水に、暑中の渴を醫しつゝ、當年の御恩を追懐いたし、報謝に懈怠勝ちなる我が心に、警策を試

み居りつゝも、亦願れば、我が伯父忻浄坊秀界が、今より六十六年前嘉永元年に、中村西光寺の老院外一名と共に、草鞋を穿ちつゝ、多くの月日を費し、北陸奥羽より關東諸州の御舊跡を巡拜して、平素其の道路の難澁等を語られたるこそ今尙昨の如く思はるれども、今日汽車郵便の便あり、電信電話の設備もありて、到處不便を感じるこそなき爲めにや、七百年前の古を追懷して、聖人御辛勞の其程に身に泌みざるはたゞ恐れ多き次第である。

然れども、御門末が全國に遍くして、到處親鸞聖人の御恩徳の廣大なることを報せんとして、御遠忌等の盛大に行はれるを見れば、祖徳の如何に廣大なるか、分るのである。我々はたゞ耳目に觸れることのみは知れども、他は存外氣附かぬことが多いので

ある。大木の枝葉が榮え、花が咲き、實を結ぶのを見て、賞翫すこは云へども、其眼に映ぜざる根幹の、如何に深く地中に根させらるかを知らねばならぬ。今や眞宗繁昌々々々稱讚しつゝある其の繁昌の根元は、我が聖人が北陸關東を始めとして、一生の行化に如何に深き親切の力を、こめさせられしか、歴々々味はるゝのである。是れこそ云ふも、唯如來の本願を信じて、無我に喜び給ひ、全く己を忘れて如來の御代官としての勸化であるからである。されば眞宗の繁昌は、聖人が弟子一人も持たずこの隠れたる深き信念より起り、其の信念が全く如來久遠の本願海の源泉より涌出するのであれば我が宗の生命は、聖人の開闢に起こりて、永遠に及ばせらるべきは、自然である。

宗祖の御流に浴する我等は、たゞ宗祖の御信念に接して、報恩の行に進まねばならぬのである。如此きことは、當前の事であれど、此の靈地に参りて今更の如く新しく感じたるまゝ、之れを記す。

(越後國分寺御草菴に於て大正二年八月六日)

畢竟依

近來私には、時々深草の元政の「扶桑隱逸傳」を披きて、幾分にも、引きしめて行きたいと心がけては居るが、其の下から、ずるけるので、閉口するばかりである。「いくたびか、思ひ定めてかはるらん。たのむまじきは、我が心かな」とは、如何にも散

亂の凡情を、能く云ふて呉れたるここが知らるゝ。

「扶桑隱逸傳」の心戒の條、元政の贊に左の話が出だしてある。

曩一僧あり。客來たりて世事を説く。僧耳を掩ふて曰く。唯今火急の事あり。既に旦暮に逼れり矣。(原漢文)

これ法敬坊が「一大事の急用あり」とて、雑談のなかばで座敷を立たれたのや(御聞書百五十六條)金ヶ森道西が、人の履を脱がぬ先きに、佛法のここを申しかけられた(同百九十八條)のご同じ心持が味はれる。

覺如上人が「今日ばかりおもふ心をわするなよ。さなきは、いごごのぞみ多きに」と(同六十八條)仰せられたのを、日々味ひ行



けば、人生の行路も、餘程氣樂に暮れて往くべきなれども、實には「一生は盡くれども、希望は盡きず」(往生要集上本)で。日々煩惱熾盛の凡夫何とも早や恐れ入る外は無。

又時々善導大師の「般舟讚」を拜誦するに、

四十八願慈に因つて發こしたまふ。一々の誓願は衆生の爲めなり。

佛は衆生の心雜亂するを知ろしめして、偏に正念を教へて西方に住せしむ。

誓願す今生佛教に順ひ、行住坐臥に専ら念佛せん。(原偈文)

ご仰せられたるを見る時、思ひ寄らぬ力づよき念を生ずるのである。如來の本願力。これが畢竟依たることは私の事實である。

新年を迎へたに就いても、毎年種々なることを考へて見るが、考へた通りに出来たことは、殆んど無い。今では何にを縁にして、たゞ念佛したいと思ふだけである。それで別に珍らしくは無いが、自分に成るべく近い人々の小傳やうのものを集めて見たら、餘程樂みがあるやうに思ふので、昨冬以來、ボツ／＼心がけて居る。それも果たして出来あがるかごうか。今では確に分らぬ。志ある人々は、注意を與へられたい。聖人の仰せに曰く。  
念佛者は無碍の一道なり

(大正六年一月一日)

# 安心小話

## ◎開宗と祖師聖人

昨年さくねんは聖徳太子しやうとくだいしの千三百年忌ねんき、來年らいねんは我聖人わがしやうじんの開宗七百年記念かいしうしちひゃくねんきねんの年とし、本年ほんねんは我名古屋別院わがなごやべつゐんでは、聖人しやうじん六百五十年御遠忌ねんごえんきの執行しつかうせられる年とし、年々ねんくさいく歳々さいさいく、何か角なにかかかで、御引おひき立てたを蒙かうむるここの多おほいの感謝かんしゃせねばならぬ。來年らいねんの開宗七百年記念かいしうしちひゃくねんきねんの意義いぎは、いろく、あらうが、聖人しやうじんの開宗かいしうは、開宗かいしうでない開宗かいしうなることが思おもはれる。聖人しやうじんはつねに法然聖人はふねんしやうじんを眞宗しんしうの開闢者かいびやくしやと仰おほせられてある。「高僧和讃かうそうわさん」を披ひらくに

智慧光ちゑまうくわうのちからより

本師源空ほんじしやうくうあらはれて

浄土眞宗じやうどしんしうをひらきつゝ、

選擇本願せんじやくほんぐわんのべたまふ

と仰おほせられ「正信偈しやうしんげ」にも法然聖人はふねんしやうじんの處ところに眞宗教證しんしうけうしやうこう興へん片州へんしやう、選擇せんじやく本願ほんぐわん弘くわん惡世あくせと讚さんじてある。

この御意おごころを思おもふに、我祖師聖人わがそししやうじんはたゞ法然聖人はふねんしやうじんの仰おほせを信しんじて念佛ねんぶつして成佛じやうぶつする外ほかはない。其念佛そのねんぶつは、いづれの行ぎやうも及およびがたい我等われらのために、彌陀如來みだにょらいが選擇せんじやく攝取しやくして往生わうじやうの本願ほんぐわんとして下くだされた御蔭おかげであること、尊信そんしんなされたのである。我が聖人しやうじんは、よき人の仰おほせを信しんじて喜よろこぶのである。我われは律師りつしでも戒師かいしでもない。田夫でんぷ野叟やそうと同じく賀古がこの教信沙彌けうしんしゃみのやうなものである。されば、我われは教がしゆるものではない。聞信もんしんするものであること終生しゆせい「受うくる身みの上うへ

である』と云ふ敬虔なる念佛者であらせられた。これが心から御同朋よ御同行よごかしづきて仰せ下だされたる我が聖人であつた。

されば我が聖人は御本書『教行信證』の總序に『たゞ眞宗の教行證を敬信して、特に如來恩徳の深きことを知りぬ。こゝを以て聞くところを慶び獲るところを嘆ずる』と筆を起し『慶ばしき哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ、慶喜いよく至り、至孝いよく重し。これによりて眞宗の詮を鈔し、浄土の要をひろう。たゞ佛恩の深きことを念じて、人倫の嘲を耻ぢず。若し斯の書を見聞せん者は、信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願

力に顯し、妙果を安養に彰さん』と結ばせられたのである。

◎開宗でない開宗

開宗の御本書ご申す『教行信證』を文類ご名け、一代の御選述、全く『愚禿すゝむる所さらに私なき』御示であらせられ、御同朋御同行の手本ごならせられた外はない、されば此本願念佛は、法然聖人の浄土眞宗であつて此の本願の御意のまゝ、一向専修の信心を教へられたが法然聖人であるのに、其れを深く信受奉行することのできぬ者のあるは、傷ましいことであること『本師源空あらはれて、浄土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふ』と讚じたまひ、本願の念佛なれば、如來の廻向を頂く外はない。あくまで受くる宗教の手本ごなつて、弟子一人ももたず、御同朋

よ御同行よごて、此宗を傳へさせられたが我が聖人である。それゆえ此宗の祖師聖人は、所謂開宗でない開宗なることが、深い意義のあるところであるご尊信するところである。

◎繁昌の地方

今日、我が宗門繁昌ご申す地方では、兎角僧分も門徒も、教ゆる方になりゆきて、自ら受行する敬虔の御同朋の一人なることを忘却しやすい傾きありはせぬか。お互に祖師聖人の御精神を手本として、受行者たる態度を失はぬやうにいたしたいものであります。一蓮院贈講師は、

我がための法ごは知らでいたづらに  
人を教ふるもののみごせし

ご自警せられたるは、眞に貴いことである。我等御同朋は、ごこまでも受くるものでありたい。教ふるものごなるごき眞實報土の行人ごはなられぬ。疑城胎宮、懈慢界の行者ごなる「報土の信者はおほからず、化土の行者はかすおほし。自力の菩提かなはねば、久遠劫より流轉せり」『一大事ごいふはこれなり』ご仰せられた。

(天正十一年五月五日)

讚仰の季節

一

我々は、いかなる因縁ありてにや、親鸞聖人を祖師ごするこの

淨土眞宗に逢ひ、如來選擇の本願たる念佛のいはれを聞くことを得たのであらう。「たましく行信をえば、遠く宿縁をよろこべ」如來のやるせなき大悲の光明にはぐくまれた御かげである。若し如來の本願を聞かなんたら、永遠に此の煩惱生死の苦海を渡るこの出来ぬ我身である。恐れと慶びとが同時に浮んで来る。まことに宗祖聖人は我々の御先達であらせらるゝ、ご共に、如來本願力の權化であらせられることを思ふ。

謹んで我が聖人の御一生をうかゞふに、あくまで底下の凡愚として、信受奉行したまひ、受くる宗教の御先達となり、祖師となつて下されたのである。御撰述の最初御本書「教行信證文類」の初めには眞宗の教行證を敬信して特に如來恩徳の深きことを知り

ぬ。こゝをもて「聞く所を慶び獲る所を嘆ず」さて六卷の文類を集め、終りには「慶ばしき哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す、深く如來の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよく重し。こゝを以て眞宗の詮を鈔し淨土の要をひらふ。たゞ佛恩の深きことを念じて、人倫のあざけりを耻ぢず。若し此書を見聞せん者は、信順を因とし疑謗を縁として、信樂を願力にあらはし、妙果を安養にあらはさん」と佛恩師恩を念じつゝ、在世滅後の我等凡愚の、一日も早く此如來の大願海に歸入せんことを思し召さるゝ、矜哀の御言にて結ばれてある。

二

御一生の御撰述みなこの通りである。殆んど最後ごも申すべき八十六歳の「正像末和讚」を拜見するに、「正法の時機ごおもへごも、底下の凡愚ごなれる身は、清淨眞實のこゝろなし、發菩提心いかゞせん」往相還相の廻向に、まうあはぬ身ごなりにせば、流轉輪廻もきはもなし、苦海の沈淪いかゞせん」往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲をう、如來の廻向なかりせば、淨土の菩提はいかゞせん」ご五十八首の中で、三度までいかゞせん」ご悲喜の感嘆を仰せられてある。たゞうかく」ご拜見してはすまぬご思ふ。聖人の御悲喜そのまゝを我々の心ごして頂かねばなりませぬ。

明治二十一年ごろ歿くなられた本山の執事（今の寺務總長）等觀寺

阿部慧行師は、法話の度ごに、このいかゞせん」の御語を以て御開山様は「いかゞせん」ごて、もし如來の御本願がましまさずばドウシヨウゾイノウ」ご御喜びあそばされた。御まへ方はこれを何んご聽聞するぞ」ご常に涙を以て佛恩ご師恩の深重なる旨を話されたごを、今もあり」ご見るやうに想ふ。今にしていかにも恐れ入る次第である。

三

信心決定の身は平生業成ごご示され、如來大悲の願船に乗り、攝取の光海に浮ばれたる、常彼岸、常歡喜、常懺悔、常報恩の身の上ごなつたのである。世にこれほごの仕合はせ幸福があらうか。そして此の十一月は、聖人御正忌の聖月である。世には政治

季節ごか運動季節ごかある。我々御門徒は、今や御報恩讃仰の季節である。上御本廟を始め、末々の御門末まで、御正忌報恩の御佛事をいごなみ、心底から慶喜讃仰の報恩の志をする好時節ごなつた。油断してはなりません。昨年であつたか、當御門跡、御裏方、御同道にて、我が聖人御配流の越後の國へ御下向になつた。御門徒の善男善女が心から御下向を喜び迎へて、沿道には到る處、人山をきついた。それを御覽じた我が御裏方は「なみだもて御名をこなふるはらからの心の上に祖師を見るかな」と詠嘆あらせられたご承はる。貴族ごしての御巡回ごは違ふて居る。實に七百年前の祖師の御遺徳まここに尊ききはみである。

近來は宗門の將來について、種々の説もあるやうだが、我が宗

はあくまで底下の凡愚たる我等の御同朋ごなりて御開き下されたる原始の意義を失はぬやうにしたい。超世無上の特別の御本願も、この我等のためにこそあらはれて下されたのである。智者や聖者はいざ知らず。我等は此の御宗門でなければ、永劫の大事を明らむることは出来ぬのである。「濁世の道俗、よく自ら己が能を思量せよ」と時々仰せられたる聖人の御遺誠まここにありがたき極みである。

四

繁華の市中へ出るご、時々思ふごごであるが、頃日も新聞や雑誌に、かう云ふ話が見えてあつた。支那宋朝の徽宗皇帝が南巡して楊子江の流にある金山寺に登り、江上を往來する幾百隻の船

船をながめ、景色の好いのに見られて居られ「澤山の船が往き來して居る」と仰せられた。それを傍に居て聽かれた黃伯禪師は「たゞ二隻しか見えませぬ」と答へられると、皇帝には合點がつかぬ。そこで禪師は「名聞と利養、即ち名譽がほしい、利益が得たいの二隻である」と申されたこと云ふ。まことに反省せねばならぬ話でないか。我が宗祖は御自身に御本書「信の巻」に長々と信心の一念に正定聚の位となり、眞の佛弟子となり、時々尅々淨土の近づく身の上たる廣大の徳あることを行示しになり、而して「まことに知りぬ悲き哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことを快まず、耻づべし傷むべし」と仰せられて「涅槃經」の阿

闍世王興逆の因縁を長々と御引きになつて居る。去れば聖人の御言によれば、愛欲と名聞と利養との三隻の船となる。我々日常の營々として奔走し苦惱するは、全くこの愛欲名利の煩惱に使はれて居て、日も亦足らぬ日ぐらしをしつゝある外はない。悲しむべく耻づべく傷むべきに、それさへ平然として氣のつかぬ心中である。底下の凡愚はこのことである。如何にしてかゝる煩惱生死の苦海を出でんとするか。あさましいともく名づけやふのない我々である。

八代目蓮如上人山科御隱栖のころ「愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばず、眞證の證にちかづくことをたのします」と申す御文について、いろく



不審を起こし、愛欲や名利の心が多くては、往生すべきか、すべからざるかなど、互に談じあいけるを、ものごしに御聞きになりて「愛欲も名利もみな煩惱なり、されば機のおつかひをするは雑修なり、たゞ信ずるほかは、別のここなし」と仰せられたご「御聞書」の四十條に記されてある。

たゞ如來の本願を信ずるが肝要である。一切の凡夫をもらしたまはぬ誓願力があるからであるこの仰せである。

五

我が宗祖聖人は、山を下だりて法然聖人の教を受けさせられ、在家止住の愚人我等のための御先達とならせられた。他宗の祖師方が山や林を宗の本處と定め、修行の道場としたまひたのこは、

大に趣きが違ふて居る。元祖法然聖人は「念佛の聲のある處が我が道場と思へ」と仰せられ、宗祖親鸞聖人は「我はこれ加古の教信沙彌の定なり」とも、又「彌陀五劫思惟の本願兆載永劫の修行は、ひごへに親鸞一人のため」と仰せられて、我等を御同朋ぞ御同行ぞと親しく手を取りて導びいて下だされたのである。

我が聖人は悲しき哉、慶ばしき哉、誠なる哉なごご常に仰せらるるは、御自身の往生を先へ立てさせられての仰せであつて、あくまで、受くる宗門の祖師である。哉ごは感嘆の詞である。たすかるまじきものが思ひがけなく助けらるゝ身となりた喜びご懺悔の御詞である。されば我聖人は三經七祖の經論釋によりて「浄土和讃」「高僧和讃」を御作りになり、更に「正像末和讃」を作りて、

末法の我等の彌陀の本願ならでは、生死を出離し涅槃をささるべき道なきことを讃じたまひた。古今に通じて、學も深く徳も高き先徳は數多くあれども、宗祖の如く佛恩師恩を念じて、讃仰をささげられたるお方は甚だ稀である。一たび我が身のあさましきご、如來深重の大悲に氣づく時は、ただ感謝讃仰の外はない「舞ひ姫のすぐるゝわざに言たえて、ほむるあまりに名をぞよびける」たゞ佛號を稱へて慈恩を報ずる外はない。

六

いよく御正忌を迎へ奉るにつき、年に一度の報恩季節であるを思ひ、精一ばいの志をこめて報謝の懇念をいたさねばならぬ。「念佛勤行をこらしはげます」念佛に「和讃」をまじへるは、一

は音聲を休めんがため、一は稱名の義を味はんがためご存覽師は仰せられた。佛恩師恩を念じつゝ、此の太切なる報恩講を迎へ修行せねばなりません。稱名は讃嘆の行であり、又慚悔である。

佛慧功德をほめしめて、十方の有縁にきかしめん、信心すでにえんひこは、つねに佛恩報ずべし。

無慚無愧のこの身に、まことこのころはなれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ。

(大正十一年十一月)

開宗七百年

我が聖人が七百年前、元仁元年五十二歳の時、御本書「教行信

證書類」六卷の撰述を完了したまひしことを思ふとき、我等遺弟の一分に加へられた幸榮には、第一に我が爲めの教法なることを尊重せねばならぬ。今の世、安心を彼れ是れと論ずるものはある。されど自己の得脱の一大事を念ずるもの、少きやうなるは、何故ぞ。これが我が眞宗の振はぬ最大原因である。已に中興上人も「一人たりとも信心をうるが一宗の繁昌ぞ」と仰せられ又覺如上人は「專修正行の繁昌は亦遺弟の念力より成ずる」とも仰せられた。念力は常に云ふ念力ではない。憶念の信心より發現する威力である。遺弟ご名乗るお互は、反省せねばならぬものがあらう。

◎唱導の御辭退

近來親鸞聖人を語るものは甚だ多い。たゞ凡夫として開宗されたる位の處に、目をつけて居て、聖人が終生、自己の得脱を本として敢て布教家を以て任じたまはず。御歸洛の後も、ここの外に貧乏の中に御往生あらせられたる所以を思念すべきである。「口傳鈔」の初章の終りに出でたる所では「七條の源三中務丞が遺孫、次郎入道淨信、土木の大功ををへて、一字の伽藍を造立して、供養のために、唱導におもむきましますべきよしを、屈請しまふすごいへごも、上人善信つるにもて固辭しおほせられて」請待に應じたまはなんだここを出だして、次に覺如上人は付言して「上人善信、權者にましますごいへごも、濁亂の凡夫に同じて、不淨說法のことが、をもきここをしめましますものなり」ごある。我等

凡夫平生の所爲、つねに本末顛倒せることを慚愧し、何ぞぞ聖人が親しく御同朋よ御同行よご導きくだされたる大心海に歸入して、幾分にも眞實の報謝に叶ふやうご念ずるのが、開宗七百年の記念に相應するであらう。

◎聖人の御晩年を思ふ

この記念のめでたい年を迎へたるに付いては、先づ聖人の御一生の事と其の御撰述の聖教を毎日せめて二三枚づゝにても、内佛前にて味讀することに心がけたいものである。「自修の去行をもて、兼ねて化他の要術としたまひ」し聖人の遺風を忘れては、布教ではなくて汚法に陥ることにならう。今日は宗門衰退の兆歴々あらはれてある。眞に末代であり、濁亂である。これは他人事で

はない。

聖人の御時代に南都北嶺は、非常の勢力を持ちて居た。今はたゞ辛うじて伽藍のみ存するものがある。我が宗門の現状を以て百年の後を想ふ時、如何なるものとなるであらうか。先づ自身の一大事に注意してかゝらねばならぬであらう。聖人が七條の淨信の請をも御辭退なさらず、常にかゝる席に出でたまひしならば、御晩年は、左まで御貧困にはあらせなんだと思はれる。こゝに於て末世相應の要法は、いよく彌陀本願の一法なることが知れ、聖人御内省のますく、深刻に向はせられたることも解り、又關東より御歸洛になつた御心狀をも幾く分、拜窺することをするやうに思はる。眞に自己を念じ、宗祖を讃仰せんとする人々と共に、聖

人御開宗の眞意に叶はんことを念ずる外はない。遇ひがたい此の年に遇ひたるについて、かくは所感を記したのである。

◎御同朋の生涯

聖人の御出世は、我々在家往生の御先達をなし下された。若し聖人が御身を以て、本願他力の大道を示し給ふところが無かりせば、我々は永劫、迷ひの淵に沈むよりは無いのである。聖人の御一生は、どこまでも御同朋主義で、自らは布教家とはならせたまはなんだ。只々有縁の人々と共に、淨土の往生をこげたいと導いて下されたのである。此の意味に於て如來の御代官と仰せられ、弟子一人も持たぬこのたまふたのである。されど如來の御代官とは、そのまゝ、如來の「本願招喚の勅命」たる「我に歸命せよ」の

直説を御傳へ下さるゝ大使命が、聖人の御化導ならせられたのである。

◎眞の御遺弟

聖人は眞の佛弟子を釋して「弟子とは、釋迦諸佛の弟子なり」と仰せられた。彌陀の本願を釋尊が、出世の御本懐として説かせられた、其れを聖人の信心に御受けあそばされて、御勸化なされたのである。「如來の教法を我も信じ、人にも教へ聞かしむるばかりなり。その外は何を教へて弟子と云はんぞと仰せられつるなり」。我々御遺弟として頂いた仕合はせは、たゞ聖人と同じ大道を踏みつゝ、進ませたいとくここに在る。

◎眞の善知識

眞の佛弟子とは、眞の知識の教を信ずる念佛行者を云ふ。我が聖人は、此の知識と弟子との兩方の眞の字を、何れも「眞の言は、假に對し偽に對す」とお釋なされて、假の知識とは、自力修行の法を教ゆる人、假の弟子とは、其の教によつて修行する行者であつて、此中には此土で悟りを開かうとする聖道門の人と、淨土の往生を願ふ者との二つある。又偽りの知識とは、佛法でない外道を教ふる人で、近く云は、耶蘇教や天理教などを教ふる者を云ふ。偽の弟子とは其れ等の教を受くる者を指すのである。今日の佛教徒の中に各宗開山の教へられたる成佛得道をさしおきて専ら現世の祈願や、八卦禁厭などを僧業のやうにして居るものは、みな「外儀は佛教のすがたにて、内心外道を歸敬せり」と我が聖人

の歎かせられた人々である。然るに又我が御門末の中にも、存外に此の偽の弟子たる人の多いのを認むるのは、實になさけない次第では無い歟。「眞の知識にあふここは、かたきがなかになほかたし」他力の本願念佛の一道を、正面より教へ下さる眞の善知識にあひたるは、實に不可思議の因縁に由ることゆゑ、眞實に大安心を得やうとする人は、深く、心を留めて聽聞せねばならぬのである。

本年開宗七百年の御法要を迎へたるに就いても、花あつて實の無いやうなここにならぬ様に念ずる外はない。

●聖人の御化導

我が御開山山人の御一流で無ければ聞かれぬことである。蓮如

上人は「浄土一家のうちにおいてあひかはりて、ここにすぐれたるいはれあるがゆゑに、他力の大信心ごまうすなり」と仰せられ、覺如上人は「こゝに祖師聖人の化導に依つて、法藏因位の本誓を聞く」と喜ばせられた。

全體信心安心ご云へば、通途では、我々の方に於て工夫して固めねばならぬ。其れが爲めには、昔から骨折られた高僧方は少なくなは無い。然るに我々は、大菩提心は愚、一寸眞面目になつて法を求むるご云ふごさへ、中々出来かぬる淺間布い凡夫である。さればごうしても迷ふて來て迷ふて行くより外に仕方のない我身である。三世の諸佛も恒沙の菩薩も、可愛いさうだご思召されつゝも、仕方が無いご手を御引きになつた。

阿彌陀如來は餘りに御親切の深重なる爲め、我々を可愛いさうだごおぼしめされた御意が、つひに金剛心ごなつて、ごこゝまでも眞實心より念佛往生の本願を立て、不可思議兆載永劫に大行を成就して、たゞ南無阿彌陀佛ご云ふ御自身の名號を授けて「我名を念ぜよ必ずたすくる」と喚ばせらるゝごごゝなつた。名號は如來の本願のかたまりである。「我を念ぜよ必ずたすくる」とは、極めて手近き仰せなれども、此の中に因位の願行が悉く成就され、此の中に久遠劫來のありだけの眞心がこめられてある。されば覺如上人は法藏因位の本誓ご仰せられ、蓮如上人は「浄土一家の中に於てあひかはつて特にすぐれたるいはれあるが故に、他力の大信心ご申すなり」と讚仰なされたのである。

「獨り生れ來て獨り死んでゆく、獨り去りて獨り來るぞ」ご大經に説かせられた。此の金言を靜かに思へば、此の處へ計らずも如來は「外の行は役に立たぬぞ、其の爲めに立てた本願ぢやから、我を一心にたのため、必ずたすくる。我は南無阿彌陀佛。我は汝の親なるぞ」ご一心に喚び一向に喚ばせらるゝ、御喚聲を承はる。我等は何たる仕合はせものであらう。雜行ごか雜修ごか云ふ、いろ／＼の自力のはからひをすてゝ、一心一向に如來をたのむ身ごさせていたゞく。これぞ久遠劫來の眞の御親に遇はせて頂いた仕合はせである。

一切菩薩ののたまはく  
無量劫をへめぐりて

我等因地にありしごき  
萬善諸行を修せしかご

恩愛はなはだちがたく

生死はなはだつきがたし

念佛三昧行じてぞ

罪障を滅し度脱せし

ごあるは、いかにも自力修行の、かなはぬごを御知らせ下された八宗の祖師龍樹菩薩の智度論の説である。我が御開山聖人は、此一切菩薩ごあるを、我が御身に引き受けてお喜びあらせられたごこゝ、拜察したてまつるご共に、御開山のおかけにて、我身の仕合はせを知らせて頂かねばならぬと思ふ。生れがたい人間に生れ、遇ひがたい佛法に遇はせて頂き、而かも「ごに祖師聖人の化導によりて、法藏因位の本誓を聞く。歡喜胸に満ち、渴仰肝に銘ず」るの大感謝をさゝげねばならぬのである。

◎威徳廣大の信



我が宗祖親鸞聖人は、如來の哀々切々の大悲を信じ、無邊の極濁悪を濟はんこの本願を信樂して、今日の我れ等の爲めに無碍の一道たる他力の念佛を信すべきことを開示して下されたのである。『念佛者は無碍の一道なり天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍するこごなし』如來の本願が三世を貫き、十方に満ちくたまへる大悲の願海たる上は、此の法を信じたる信心の徳、亦威徳廣大の信である。

斯かる深廣無碍の信を得たるもの、何ぞて魔道に陥り邪法に迷ふこごが出来やう。其上念佛信ずる行者は、一切の諸佛菩薩諸天善神が影の形にそふが如く守り給ふこごは『大集經』等の佛説であるのみならず、念佛の信者は、常に其の利益を實地に味ひ得

る所である。

然るに我が宗門の人々、事によるこ、この仕合はせを得るこごを忘れて現世の祈りに身をやつし、おはらひや禁厭なごに迷ふものがある。實に勿體ないこごである。我が宗祖聖人は、特に此の事に心を注ぎたまいたこごを知らねばならぬ。

御歳六十の頃、夜中を冒して函根へかゝり給ひ、圖らずも神勅を受けたる禰宜が、御迎を申し上げて、朝餉の御飯を差し上げつゝ、一向専念の念佛を聽聞して、本願の不思議を喜ぶ身こなつた。七百年の今日尙ほ、山上には其の餘光が残つてある。

聖人の御子善鸞法師が、關東に下り給ひて、山伏巫子の徒こ共にお攘や禁厭や御符なごを作りて、迷信を勧められたるゆ

る、在世滅後の門末を誤ることを心配して、つゝに勘當をしたまふたご云ふ。如何に今日の我等の上を思召されたかを考へねばならぬ。

又法然聖人や親鸞聖人が流罪の御身ごならせられ、住蓮坊安樂坊等の四人が死刑に處せられたは、たゞ念佛申したご云ふことでは無。念佛停止ご云ふは、専修念佛の禁制であつた。一向専修の念佛で、如來撰擇の別願を深信して、雜行雜修ご自力ごを全くふりすてたる専修専念の念佛であつたからである。

一大事の後生を安心するには、一心一向に彌陀を信じて二心なぐたのみたてまつる信心で無くては、決してく叶はぬことである。出離のために雜行雜修を修することさへ、それは彌陀選擇の

思召しに叶はぬ。まして眼の前の些々たることに心をこられて、祈請をしたり禁厭なごをしたいやうな浮々した心中では、一大事の後生が聞得られるものには無い。蓮如上人は『御文』に「たゞ今生にのみふけりて、これほごにはや目にみえて、あだなる人間界の老少不定のさかひごしりながら、たゞいま三途八難にしづまん事をば、つゆちりほごも心にかげずして、いたづらにあかしくらすはこれつねの人のならひなり。あさましごいふもおろかなり。これによりて一心一向に彌陀一佛の悲願に歸してふかくたのみたてまつりて、もろくの雜行を修する心をすて、又諸神諸佛に追従まうす心をもみなうちすて、さて彌陀如來ご申すは、かゝる我等ごごきのあさましき女人のために、おこし給へる本願なれば、

まここに佛智の不思議に信じて、我身はわるきいたづらものなり  
 ごおもひつめて、ふかく如來に歸入する心をもつべし。さてこの  
 信ずる心も念ずる心も、彌陀如來の御方便よりおこさしむるもの  
 なりごおもふべし。かやうにこゝろうるを、すなはち他力の信心  
 をえたる人ごはいふなり』と御懇切にお示し下された。神や佛  
 は、我々が自分の行く末を思ふよりも、我々の事を幾層倍御心配  
 あらせられてあるを知らぬ。それに我々が我がまゝ、勝手の不足や  
 注文を、神様に持ち出して追従するやうなここがあつては、甚だ  
 相ひすまぬことである。法然聖人や親鸞聖人がお命ちがけて如來  
 選擇の別願たる本願の念佛を、専修一向に信樂すべきことを指示  
 し給ひし思召を深く頂いて、念佛の御旨に不足の思を起さぬやう

に喜ばねばならぬ。(大正十二年四月五日)

### 眞實の教

我が眞宗の祖師親鸞聖人は、釋尊の多くの經說の中より、特に  
 『大無量壽經』を以て、釋尊の御本意を説きたまひたる根本の經  
 典なりと定めたまひた。釋尊一代の説教、いづれも尊い經說では  
 あるが、我々の智慧を以て、自分の煩惱惡業を切り拂ひ、無上の  
 證りを開かうとする法を示されたのである。そこで考へて見ねば  
 ならぬのは、無上の證りとは、絶對の智慧が發らねば、開くこと

の出来ぬことで、我々の智慧では、お證りは、こんなものであらう、かうすればよいのであらう、ご手さぐりをして進むより外に仕方はないのである。釋尊が、この無上のお證りに至る順序を『瓔珞經』には、五十二段と説かれ、又其の修行の年時を三大阿僧祇劫と示された。劫とは長時と譯して、一寸計算するところの出来ぬ長時である。その上に阿僧祇とは、無數と譯して、我々の計算の及ばぬ劫を無數にかさねて、而かも三大無數の劫を経て、始めて目的の無上の證りに到るぞと示された。これは當り前のことで無數の年時を経て無數の修行をして、絶對の智慧を發こして始めて、開かるゝのが無上の證りである。それで無ければ、無上のお證りを開くところの出来やう筈がない。かやうに示させられた

は、實に當り前のことで、考へて見れば分かることであらう。これを道理成佛の法とも、智慧門開顯とも、自力聖道の法門とも申すのである。聖道とは聖者の道と云ふことで、凡夫の我等の及びもつかぬこと、云ふのである。

然るに『大無量壽經』には、已に證りを開きたまへる久遠實成の阿彌陀佛が、日々煩惱の中に迷ひつゝある我等凡夫のために、絶對の大悲を以て、絶對の智慧をしばらくして、我等凡夫の迷を離れる一道を案じ出だし、念佛往生の法を成就して、我等へ廻向したまふゆゑ、我等は、其の御佛の廻向をいたゞくとき、必ず證りを開くべき身と定まるのである。凡夫の智慧や慈悲には限りがある。それでは無上の證は開かれぬ。佛の智慧と慈悲を以て、思惟を

凝らして此の一道を成就したまひたゆゑ、我等がこの法によりて證りの開かるゝことは、決して疑ふことは出来ぬ。一道は念佛即ち佛の御名南無阿彌陀佛である。

此の廣大なる阿彌陀佛の本願の成就されたる本末を委しく説き示されて、これを以て、釋尊御自ら此世に出でたる本意であるぞと説かせられたが『大量無壽經』である。それゆゑに、宗祖聖人は此の『大無量壽經』を眞實之教、淨土眞宗と稱して、他力眞實の法門を宣説したまひたのである。

二

今より千四百年ほどの昔、支那の北魏の時代、汾州の玄忠寺に曇鸞大師と云ふ大徳があつた。其の方が『淨土論』の『註解』を

お書きになつて、眞實功德と不實功德を分け、我等の妄念妄執より修する功德は、皆あさましい煩惱の心から修行するのゆゑ、それを不實の功德と名けられて、逆も眞實の涅槃をささるべき因種とはならぬ。然るに淨土は、清淨眞實の業より成就されたるものゆゑ、其の淨土へ至れば、必ず無上の涅槃を證る。これが淨土の土徳である。大海の徳として、川々の水が、皆清淨なる同一鹹味となるが如きである。然れば亦その淨土へ往生する因も、清淨眞實の法でなければならぬゆゑ、彌陀如來は、我等凡夫のたずかる一法として、眞實功德の名號を廻向成就あらせられることなつた。「因淨なるが故に果も亦淨なり」と曇鸞大師は仰せられ、我が聖人しばしこの語をくりかへして示させられたは、この故

である。

三

我等凡夫として、この如來が、特に我等がために、無限の慈悲より、ありたけの眞心を以て、廣大無碍の智慧をかたむけて廻向成就したまひたる念佛を、いたゞかずしては、決して此の無明長夜の迷を離るゝ道はない。元祖法然聖人が、念佛往生を、如來の選擇本願と仰せられたは、これである。選擇とは、因行をも選り定め、果徳を選び取ることで、たゞ有りふれたる證りではない、無上の涅槃をうべき淨土、その淨土へ生るべき眞實の正因。これを如來が選り定めて、我等に向はせられたが本願である。本願とは根本の願、本意の願で、即ち如來の唯一の願心である。こ

れを念佛往生の本願と申すのである。我が宗祖聖人は、この法然聖人の教を受けて、始めて如來の選擇本願こそ、私一人の御苦勞であつたのだと、一心に信樂して、専修一向の念佛宗に入らせられた。されば我等の聞くべきは、如來選擇の願心であつて、頂くものは、たゞ如來選擇の念佛である。このここに心の定まつたのが、如來の動きたまはぬ大悲の願心より與へられたる他力の信心である。本願を聞くは名號を頂くこと。名號を聞くは本願を信ずるのである。我が聖人二十九歳の春、叡山を下だつて法然聖人の御教を受けさせられた時、「建仁辛酉の曆、雜行をすて、本願に歸す」と喜びたまひ、其の本願のことは、「大經」に開説されたるを以て「大經和讃」には、「如來興世の本意には本願眞實ひらきて

ぞ」ご讚せられ、又の『和讚』には「信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり」と仰せられたのである。

四

我等、何の幸ぞ、このあひがたき如來選擇の願心、念佛往生の他力眞宗に遇ひ、如來の金剛心たる眞實の信心を獲得する身ごしていたゞいたのである。覺如上人が『報恩講式文』に「こゝに祖師聖人の化導によりて、法藏因位の本誓を聞く。歡喜胸に満ち、渴仰肝に銘ず」と仰せられたは、人ごごではない。法藏因位は阿彌陀如來の因位御修行中の御名であつて、その時に念佛往生の一道を選択して御定めくださったのである。一切の聖教は、此のいはれを明かに傳へさせられたる外はない

先徳の御語に「本願を信じ、念佛を申さば佛になる。そのほか何の學問かは、往生の要なるべきや、もしこのことはりに迷ひはんべらん人々は、いかにもく學問して、本願のむねを知るべきなり」と示されてある。本宗に於ける學問の要は、一大事の用事を明らむるの外はない。(大正十二年七月)

法藏の願力

一

智慧の念佛うることは

法藏願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば

いかでか涅槃をさくらまし」

法藏の願力

安樂佛土の依正は

法藏願力のなせるなり

天上天下にたくひなし

大心力を歸命せよ

我が宗祖聖人三帖の御和讃のなかに、二回「法藏願力のなせるなり」この御語がある。この法藏菩薩の大願力が分らねば、我等凡夫が、悟りをうる道はない。石川了因師へ或る人「佛法を如何に心えたら、よろしからうか」尋たら「佛法は、すべて我々の考へたり思ふたりするところと反對ちや心得たら、間ちがはぬであらう」ご答へられた。

「我々は此世は常住だと思ふ。佛は、不定の人間だご仰せられた。我々は善いものちやと思ふて居る。佛は、我身はあさましきものぞご思へご教へさせられた。我々は自分の智慧で本當の道が悟

れるご思ふ、佛は、それは駄目だ、如來の御思案に同心して、計らひを交へるなご教へて下された」このことを傳へ聞いて、まことに尊い御話であるご頂きました。

二

法藏菩薩の大悲眞實、これのみ本當の眞實であつて、我等凡夫の眞實とするところは、根本より不眞實であることに氣附かねばならぬ。小にしては個人々々より、大にしては天下國家に至るまで、ごごとく凡夫我執のかたまりではない歟。さればこそ絶對の平和を此世に希望するごことは出來ぬ。いかなるものをも見せずあはれみまします法藏菩薩の大悲の眞實心に歸入せずしては、安住すべき處は、決してないのである。



その法藏菩薩の大悲眞實を開示されたのが、即ち『大無量壽經』の説教である。我々の求むる所は、此の眞實である。されども我々の心を以ては、この眞實は絶対に得られぬ。たゞ佛智を信受するこのこそ一つによつて、我等の胸に佛の眞實が満入して下されて、今日煩惱罪濁のあさましき心に、金剛の大信心を決定して、佛智の御はからひにて、思ひがけない大般涅槃に云へる絶対眞實の世界へ、到るべき身ご明かに定まるを得るのである。佛ごは法藏菩薩の得させられたる御さごりである。それご全く同じ御さごりをうることを、只今明白に決定して、眞に慶喜の念にみたさるゝ身ごなつたのである。

三

これは決して空想でも、假定でもない。眞實が眞實を産んだのである。『和讃』に

釋迦彌陀の慈悲よりぞ 願作佛心はえしめたる  
 信心の智慧にいりてこそ 佛恩報ずる身ごはなれ  
 ご讃ぜられ。

不思議の佛智を信ずるを 報土の因ごしたまへり  
 信心の正因うるごは かたきがなかになほかたし  
 ご、我等我執の心をすて、仰いで佛智に歸すべきごを嚴誠したまひたのである。

世には我身の實際に氣付かずして、この佛智の眞實大悲をうけたまはらうごせぬものが多い。それゆゑ『微塵劫を超過すごも、

佛願力に歸しがたく、大信海に入りがたし』と痛く惜みたまひてある。お互に先づこの我が聖人の御親切を深くいたゞいて、佛の大悲眞實と、我が聖人矜哀の御先達とを、空うせぬやうに心がくるが、大切である。

◎蓮如上人の御苦勞

眞宗の中興蓮如上人の御化導の、實に盛んなりしところは、『末代の不思議なりたゞここもおぼえはんべらず』と當時の人々が驚いた。蓮如上人御自身にも、驚かせられたこと、思はれる。傳道のここを考ふるもの、必蓮如上人のここを思はずには居られぬ。今日我眞宗の大をなしたるは全く蓮如上人の御苦勞である。

蓮如上人の御教化は、たゞ彌陀をたのみて念佛せよ、その上は

人間のありさまにまかせて世を送れ』と示させられたのである。御安心については最も御力を注がせられた。『教行信證』『六要鈔』を表紙の破れるほど御覽じて、其精髓をつかみ出だして而も分りやすく、さしよせて示させられたのが、『雜行をすて、後生たすけたまへ』彌陀をたのため』この御化導である。御語の通りに、すなほに御受けをすれば、直に如來眞實の信心を決定するここが出来るのである。信心や安心の語さへも解しえられぬものも、後生一大事の心がけより聽聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候間、信をうるのである。言を曲げて義を取る如きは、特に蓮師の『御文』や御物語を頂く上には、すまぬことである。

蓮師の御時代は應仁文明の大戦亂に際し、上から下まで、京よ

り田舎へかけて、人心不安戦々兢々として、生死無常のありさまを目の前に見て居り、財産も生命も、眞に風前の燈火のやうに危い時節であつた。されば一般の人々は勿論、たごひ上流の人々でも、學問などに心を寄せては居られなんだ。我が國の文學の最も衰退して居た時代であつて、外交上の文書なども、五山の禪僧によつて取り扱はれた程になつて居る。この時に當つて特に可憐なる下層の人々に同情を注いで、一時も早く安心を得させたいこの大悲の御苦勞が、蓮師御一代の行化である。故に適切に簡明に平易が最大要件となつて、日々の御化導となり、一通々々の「御文」になつて、立ち處に信心決定せしめたまひたのである。

文明三年の初夏五十七歳にて北陸へ入りたまひ、七月二十七日

吉崎の山崎に一字の坊舎を立てられ、同七年八月下旬迄、五ヶ年に亘りて、農や漁を本として居る在家無智の人々が、正しき御目當であつた。御駐在三年目文明五年九月、越前超勝寺門徒の心得ちがひを諭したまひたのを見るに

抑、年來超勝寺の門徒にをいて佛法の次第、もてのほか相違せり。そのいはれは、まづ座衆ごてこれあり。いかにもその座上にあがりてさかづきなんごまでも人よりさききにのみ、またそのほかたれくにもいみじくおもはれんずるが、まごごに佛法の肝要たるやうに、心中にこゝろえをきたり。これさらには往生極樂のためにあらず。たゞ世間の名聞ににたり。

ご厳しく誡めたまひ、次に

しかるに當流にをひて、毎月の會合の由來は何の用ぞなれば、在家無智の身をもて、いたづらにあかし、いたづらにくらし、て一期はむなしくすぎて、つゝに三途にしづまん身が、一月に一度なりとも、せめて念佛修行の人数ばかり、道場にあつまりて、わが信心は人の信心は、いかゞあるらんといふ信心沙汰をすべきやうの會合なるを云々。

こゝ、會合する所詮を教示したまひてある。されば今日に於いて我示門の存在は、たゞ此一途を明かにして、其他のことは、みな此事に至るまでの道ゆきにすぎないのであることを忘れてはならぬ。

そして蓮如上人は、きはめて通俗的に用意周到の御教導を下だ

されたことは、一々申すまでもない。特に吉崎へ御出でになつて三年目に「正信偈」「和讃」を四帖一部として御開版になつたことは、晝夜六時の勤行方式を、朝夕二度、正信偈六首引に御改正になり、僧分も在家も、こもぐにつこまる法式を御定め下され、念佛勤行の眞の意味を味ひうる途を開かせられた。あくまで我等凡愚の、日常の宗教として御教示を垂れたまひし御意を有りがたく思ふのである。

されば蓮如上人の御教化が、奇蹟的に繁昌なされたのは、時機に相應したことは云へ、上人の信念の溢れたること、懇切をきはめたるご用意の周到なりしことなごが、一々上人御再興の御恩徳となつた。今日の御門末、お互に蓮師御再興の繁昌を、たゞ偶然の出

來事と輕視しては、まことに相すまぬことである。

◎後に悔ゆとも及ばず

慈心に教誨して、それをして善を念ぜしめ、生死善惡の趣き、自然にこれあるを開示すれども、而も肯て之を信ぜず。苦心に與に語れども、其人に益なし、心の中閉ち塞きて、竟に開解せず。いのち將に終らんとして、悔いご懼れご交々至る。豫め善を修せず。窮るに臨みて方に悔ゆ。之を後に悔ゆるとも、將に何ぞ及ばんや。(大無量壽經)

すべて事は、平生に在りて成る。「それ見たか、常が大事ぞ、大三十日」ごなつてからは役に立たぬ。今や世間の風潮は、浮華に流れ、たゞ目前の利害や一時の享樂に耽りて、前後の思慮を缺い

て居る様子が、あり／＼と現はれて來て居る。此の際に於いて、一昨年九月一日思ひがけない大震災がおこりて、人心に動搖を來たし、驚かされたことは、今さら申すまでもない。我が聖上陛下には、こゝに於て剛健の氣風を振作すべく、荒怠相いましむべき旨を教へさせられるに至つた。國民たるもの、恐懼恭承し奉らねばならぬ。

つらく／＼案ずるに、我が大聖釋尊は、無限の大慈より、因縁因果の道理を開示し、すべて業の免れ得べからざる旨を明かにして、こゝ／＼と自己の責任なることを反省せしめたまひ、今日より踏みしめて、まことの道に入るべき旨を指教したまひたのが、一代五十年の經說である。中に於いて「大無量壽經」には、釋尊

が本佛彌陀の大願力を開演して、彌陀が絶対の本願たる名號を念じて、安住の地を得せしめ、更に人道の守らざるべからざる旨を懇に教へられたるは、正しく現代に於ける活きたる指針たるを思はねばならぬ。

思ふに明治時代は、智育を先きとしたのであつた。維新の先覺者が、西洋文明の燦爛たる様子に驚き、少くも彼等と同等の形にせねば、世界の舞臺へ乗り出だすことはならぬと感じたからであつて、あらゆる哲學科學の輸入を圖り、知識の進歩を企てた。久しく鎖國主義であつた我が國としては、已むを得ないこと、申さねばならぬ。其結果として、東洋の文明、特に我が國の文明精華まで亡失せんとしたのである。一にも二にも舊物破壊々々成り、

甚だしきは綠髮茶眼をさへ變へねば、眞人間でないごまで唱ふる者が出た時代があつた。其のために明治二十三年十月、教育の勅語を發せられて、國體の精華を見失はない様に示されたのである。されど一時極端に進んだる西洋心酔は、容易に覺醒するごが出来ず、明治の晩年には容易ならぬ事變の發らうとしたのは、甚だ遺憾のごであつた。

されば明治四十一年には、戊申詔書が煥發せられ、大正の御代となりては、特に德育の方面に注意せらるゝごとなり、大震災の不慮の凶變に際しては、再度の詔書が發せられたのは、何れも德育の方面に關して、あるは、恐れ多き極みであるが、亦現時に於ける適切なる御詔勅である。

兎角人間は増長しやすい性質 持ちて居る。日清日露兩度の大戰に、連捷を得たのは、一は物質文明の力ではあるが、亦一つは我が國の傳統的義勇の精神に基くは、勿論である。

敷島の大和心の雄々しさは

事ある時ぞあらはれにける

この大精神を、日常の精神として進むべきが、現代吾人の心がけであらねばならぬ。

今やたゞ表面の徳目だけでは、恐らくは徹底したる精神訓育とはならぬ。佛陀絶對の平等心を頂きて、篤敬三寶の基礎の上に、上下和諧の實を擧げねばならぬ。これ我が國の美風が、聖徳太子の施設によりて、國體と佛教と不即不離の間に養成され來たりた

所以である。國民全體この處に目醒めて、精神の基礎を固めねば、眞に悔ゆとも及ばぬこと、ならう。我が「大無量壽經」に眞俗二諦の教旨を如來の本願海より宣示せられたるも、全く是の意義を顯示せられたること、有りがたく拜誦するここでありませ。 (大正十四年一月一日)

このお彼岸の時節

一

彼岸とは、くはしくは到彼岸と申して、梵語の波羅密多羅の譯語である。彼岸とは、涅槃の彼の岸を云ふ。智慧をみがき善事を

このお彼岸の時節

修し、つごめて涅槃のさざりに向ふことを到彼岸と云ふのである。我が國では、春秋二季の最も氣候の好い此の時には、特に油断をせぬやう佛道修行をつこむべしとて、彼岸會と名づけられたのはまことに、有りがたいことである。されば佛教各宗いづれの處でも、特別の營をするのと同じく、我が浄土の眞宗も、二季の彼岸會を修するを例とする。

二

佛道修行と云へば、時節にかはりなく油断せぬのが當り前で、一年三百六十五日、日々心がくべきであるが凡夫の身として、中々さうは出来ぬ。それでせめて春秋の好時季をなりともとて、定められたのである。然るに我が浄土の眞宗は、一たび他力の信

心を決定したる身は、その時、如來大悲の願船に乗せられて、一日々々浄土のさざりの近づく身の上としていたゞいたの故、平生業成の常彼岸ぞ示されたのである。一念の信心が大切なるは、この故である。本願寺三代目覺如上人は

この一念を他力より發得しぬるのちは、生死の苦海を、うしろになして、涅槃の彼岸にいたりぬる條、勿論なり。

と示させられた。而してさらに

この機のうちへは、他力の安心より、もよほされて佛恩報謝の起行作業は、せらるべきによりて、行住坐臥を論ぜず。長時不退に到彼岸のいひあり。

と仰せられた。起行作業とは、すべて報恩のいごなみである。信



の上は、自然に報恩の行業は修せらる、故他力の不思議で、日々夜々に彼岸の行者であるこのことである。他力々々口には云へど、深く如来久遠の大願力を會得して、報恩のこゝろをもて、その日くをくらす人は、甚だ稀れであらう。お互に耳なれ雀になりてはならぬ。

三

いまこの彼岸の時節にあたつて、思ひつくところがある。先づ時節の暑い寒いのまん中であり日の長い短いのまん中である。たゞ氣候が好いさばかり思うてはならぬ。寒いのが、これから暑うなり、暑いのが、これから寒うなる。暑い寒いさ云ふて居る間に、一生は過ぎ去る。されば生まれがたい此の人界の生を受け、あい

がたい此の御法にあひながら、いたづらにしてはならぬぞこの御注意が、彼岸會でないか。まことに大事であります。

四

又佛法は、常に中道をたふさぶ教である。世の中に有無の邪見さか、右傾左傾さか云ふて、互に争ふことであるが、中道でなければ本當ではない。善惡の因果は、自然の應報で、きはめて正直にめぐり来る。如来の本願を信じて、念佛の中で、世のため人のために、報恩の行業をつこむるは、眞に有無の邪見をはなれ、右傾左傾に片よらざる大乘無上の法を信じたる念佛行者であり、光明中に生活する歡喜地の菩薩である。これを善導大師は、眞の佛弟子とも、妙好人とも最勝人とも讚めたまひたのである。

五

我等が如來の大悲によつて、常彼岸の身としていたゞいたにつ  
いて、蓮如上人は「同行の前にては、喜ぶものなり、これ名聞な  
り。信の上は、一人ゐて喜ぶ法なり」と仰せられた。「君子はそ  
の獨を慎む」と古人も申された位であるから、一人居る時に、油  
斷せぬやうに注意せねばならぬ。お互に、一人居て仕事をする  
時、又は一人で道を行く時、何等の妨もないのに、存外に念佛  
は稱へられぬものであります。人の前では、念佛して悪い時であ  
り、又名聞げに見ゆることもある。一人の時は、何も遠慮は入ら  
ぬ。まことに心やすく、のび／＼として稱へることが出来る。こ  
んな好い時はない。

生死の苦海ほごりなし。ひさしくしづめるわれらをば、彌陀  
弘誓のふねのみで、のせてかならずわたしける」

ごは、他力の到彼岸の意である。又

彌陀觀音大勢至、大願のふねに乗じてぞ、生死のうみにうか  
みつゝ、有情をよばふてのせたまふ」

彌陀大悲の誓願を、ふかく信ぜんひごはみな、ねてもさめて  
もへだてなく、南無阿彌陀佛をこなふべし」

ごは、常彼岸の念佛行者ごなれごの御すゝめである。

我が無上覺院達如上人は

はからはず弘誓の船にうちのりて、

浮き世の夢を見ながらぞゆく

ご詠じたまひた。今は彼岸會の時節である。大切な時ではありませぬか。(昭和二年四月五日)

### 遺弟の念力

一

今日の御宗門を復興振起するは「遺弟の念力より成ずる」外なきは、申すまでもない。念力云へば、世間の常に申す懇念の力ご、きこゆるけれども、是れを切りつめて其の本を尋ねれば、信念の力より現はるゝので無ければ、本當の念力ではない。既に中興大師蓮如上人は

一宗の繁昌ご申すは、人の多くあつまり威の大なることにてはなく候、一人なりごも、人の信を取るが一宗の繁昌に候

ご仰せられて、其證據の文として

然れば專修正行の繁昌は、遺弟の念力より成ずごあそばされを  
かれ候

ご覺如上人の御語を引用なされてある。別して東京では、大震災以後、何も彼も復興々々の呼聲が高い、他は兎も角もであるが、我が御宗門の復興は、物質上の事は第二である。先づ宗祖聖人の御傳へくたされたる專修正行の御繁昌でなくてはならぬ。所謂一向專念の宗義を明かして、有縁の人々共々に手を引きあふて、往生淨土の本懷をこげねばならぬ。

「一向專念の義は往生の肝腑、自宗の骨目なり」

た、如來の本願に選擇攝取して、我等往生の不行として、念佛の一法を廻向成就してくだされた。この念佛こそ、如來が久遠劫來、大悲の眞實を傾け無碍の佛智を以て、我等凡夫のために成就したまひ、我をたのめ我が名を稱へよと、招喚したまふ御いはれである。我等若し他の行にても、この生死流轉の迷を出過するこゝが出来ぬならば、大悲の御胸をいたたまふこゝはなかつたのである。いつれの行も叶ひがたく、曠劫多生の間、空しく生死々々迷ふて來て、いつが終りご云ふ果てしのない流轉の我等である。諸佛もまします、菩薩も多くあらせられる。されど此の底下の凡愚をたすけたまふべき誓願がましまさぬ。我が阿彌陀如

來は、此の仕て見やふのない我等をあはれみましゝて、たすけ了ふせねば、我も正覺を取らぬぞこの、超世無上の本願を立て、今や已に成佛したまひ、淨土も建立せられて、煩惱強盛の凡夫をたすくる御用意が出来あがつた故、何事の條件も付けたまはずして、一心に我をたのめ我が名を稱へよ、必ず我が淨土へ迎へ取らんご御喚びくださるのである。

一向專念、專修正行ご承はれば、我等が身かまへでもしてかゝるこゝかの様子に思ふまいものでもないが、今はそうではない、この大悲眞實の御親でなければ、すがるべき方もなく、たのむべき處もない。もごとく我が御親は、私のために、私のたすかる法を一心に思惟し一向に修行して、今や私のたすかる道を成就なされ

たのである。この御親の大悲眞實の金剛心、己を忘れて喚ばせたまへる哀々切々の仰せが、我をたのめ我名を稱へよ、我は南無阿彌陀佛ご云ふ正覺を成就したのであるこの仰せである。

されば我が宗祖聖人は、「南無の言は歸命なり、歸命ごは、本願招喚の勅命なり」と仰せられた。御手を以て御招きになり、御口を以て喚びたまふ。我をたのめ此方へ來いの御招喚は、今たゞ思ひ付のここは思ふな、本願招喚の勅命なり、五劫の思惟も永劫の修行も御身を招喚して我が淨土へ迎へ取り、我と同じく無上の妙果を得しめたい本願の御眞實であるこの御示しである。

如來の作願をたづねれば、苦惱の有情をすてずして  
廻向を首こしたまひて、大悲心をば成就せり

眞實信心の稱名は、

彌陀廻向の法なれば

不廻向ごなづけてぞ、

自力の稱念きはるゝ

されば眞實大悲の佛心が、仕て見様のない我等の胸に徹到して、他力金剛の信心ごなつてくださるのである。

智慧の念佛うるごは、

法藏願力のなせるなり

信心の智慧にいりてこそ、

佛恩報ずる身ごはなれ

ご示させられたのである。念佛申すがたには變はりはなければごも他力廻向の念佛のいはれを、明かにしてくだされたは、全く宗祖聖人の御かけである。他力眞宗の興行は、すなはち今師の知識より起り専修正行の繁昌は、また遺弟の念力より成ず」と讃ぜられたのは此の故である。さればたゞ「佛號を稱して師恩を報じたて

まつる」のが報恩の心がけ遺弟の念力である。

二

佛慧功德をほめしめて 十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひごは つねに佛恩報すべし

信心相續の日ぐらしは、佛徳讃嘆であり佛恩報謝たることは、我宗祖聖人の御手本によつて明かに知られる。我等永劫の迷ひに沈淪して生々世々浮ぶ時節のないものが、超世無上の彌陀の本願により、たゞこの念佛の一法を信ずるることによつて、思ひがけなくも、淨土無爲の妙果を期する身としていたゞいたのである。西行法師の歌に准じて云へば「迷ひ來て悟りうべくもなかりつる、心を知るは、御慈悲なりけり」越後の良寛法師さへ、同國三條の御

坊にて「不可思議の彌陀のちかひのなかりせば、なにを此の世の思ひ出にせん」と詠ぜられた。「人間匆匆として衆務をいこなむ、年命の日夜に去ることを覺えず、燈の風中に滅する期しがたきが如き」我等なれば、後生を一大事と存じて、すなほに善知識の教へ隨ひ、まことに逢ひがたき此の如來の本願を信受奉行せねば、取りかへしのつかぬことである。

「いそげ人、彌陀の御船のかよふ世に、乗りおくれなば、たれか渡さん」今日今時、この御法に逢ひたるが、萬劫の仕合せである。先年朝鮮を一巡したが、其の節參られなんだ南方の佛蹟を本年八月に順拜した。扶餘と云へば百濟の都で、今より凡そ千三百年の昔聖明王が開かれた所である。我が朝欽明天皇の御宇、

聖明王が上表して佛像經卷等を多く奉獻せられた事は、國史に見えて、この時正式に佛教の傳來した事は、皆人の知る所である。その百濟のみならず朝鮮全體、當時佛法の盛んであつたことは申すまでもない。然るに今日百濟の都であつた扶餘へ往つて見ると、古都の盛觀も、佛寺の遺物も現存せず、まことに哀れと云ふも、中々愚である。百濟は聖明王より約百年の後、我が朝、天智天皇の頃、新羅と唐との聯合軍に亡ぼされたのであるが、其の時扶餘山中の宮殿より逃げ場を失ふた女官達が、白馬江即錦江に臨める大巖石上より、身を投げて死んだ。其の狀あたかも落花の片々散るやうであつたこと、巖石を落花巖と名づけたこと云へる傳説がある。その大巖石の右を傳ふて江岸へ降ると、そこに鼻蘭

寺と云ふ小庵がある。私の参りたのは八月十一日、恰も舊の七月七日の七夕に當たつて居たので、掃除もしてあり、附近の婦人などが三五人兒女をつれて佛前に禮拜するのを見て、何とも云へぬ有りがたさ、なつかしきを感じた。これ亦聖明王などの徳政感化の餘風である。然れども、今我等が信奉する彌陀他力の本願の意は、彼等の夢にも知らぬ所である。朝鮮の佛法は甚だ振はぬ、それには内外いろ／＼の事情もあるか、兎に角、佛法の種子は蒔かれてある。本年九月、我が、御法主臺下御裏方御揃ひにての御巡化を縁として、内鮮有志の人々が、畢生の努力を以て、佛教の復興をいたし、一は佛祖先徳の鴻恩に酬る、一は内鮮融和の基礎を固め、以て皇恩の萬一に奉答せねばならぬと思ふ。

而して又、轉じて新羅の舊都たりし慶州に往きても同様であつて、百濟を亡ぼした時は、全朝鮮を統一したる太宗武烈王の朝で、金愈信なご云へる名臣が居た。其後約三百年の後に高麗のために亡ばされたのである。「きこしめせ鎌倉ごのも草の露」ご芭蕉翁が木曾義仲を弔ひたのを思ひ合はせることである。こゝも亦扶餘ご同じく國の滅亡ご共に宮殿も佛閣も灰燼に歸したものと見える。その慶州の村はづれに芬皇寺ご云ふ小庵がある。向ふて門前右側に三重の廢塔があり。其の右に和靜大師碑の礎石のみ存する。この大師こそ我が法然聖人の『選擇集』の教相章に出でたる元曉大師である。元曉は華嚴宗の大學者で、亦淨土願生の大徳であつた。其の著述『遊心安樂道』に「淨土宗の意は、本凡夫の爲

にして、兼ねては聖人の爲なり」と申された。それを法然聖人は御引用になつたのである。思ふに元曉の語は、法然聖人の選擇本願の念佛義ごは直ぐに一つであるごは申されぬが併し淨土宗の意は、本爲凡夫兼爲聖人ご云はれたる所、如來が特に凡夫の爲に念佛往生の一道を御開きくだされる旨を見ごめて居られたごを思ふ時、元曉自身には往生淨土でなくては、出離生死の方法のない凡夫たるごに氣付かれて居たのであらう。何れにしても、かゝる高德の住せられた寺が、今は殆んど荒廢に近い有りさまなるを見るご、何ごも云ひ得ない淋しさを覺ゆるのであつた。

我が祖師聖人八十餘歳の御老年に及ばせられ、ますます深く遇法の因縁の只ごごならぬ旨を味ひたまひて、聖徳太子ご法然聖人



ごとを浄土じやうどの観音くわんのん勢至せいしの化現けげんと仰おほがせらるゝことゝなつた。  
 聖人しやうじん(親鸞) 後の時とき仰おほせられてのたまはく。佛ぶつ教けう昔むかし、西天さいてんより起おこ  
 りて經論きやうろん今東土いまとうどにつたはる。これひごへに上宮太子じやうぐうたいしの高徳かうとく、山  
 よりも高く海うみよりも深ふかし。我が朝あさ欽明天皇てんめんのうの御宇みやうに、これを渡わた  
 されしによりて、すなはち浄土じやうどの正依經論しやうえきやうろん三部經ぶきやうと浄土論じやうどろん等らう、  
 この時ときに來至らいしす。(中略) 大師聖人だいししやうじん源空げんくう すなはち勢至せいしの化身けしん、  
 太子たいしまた觀音くわんのんの垂跡すゐしやくなり。このゆるゑに我われ、二菩薩にさつの引導いんどうに順じゆんじ  
 て、如來にょらいの本願ほんぐわんを弘ひろむるにあり。眞宗しんしゆこれによりて興こうじ・念佛ねんぶつ  
 これによりて煽さかんなり。これ併しかしながら聖者しやうじやの教誨けうけいによりて、さ  
 らに愚昧ぐまいの今案こんあんをかまへず、彼かの二大士にだいしの重願ぢゆうぐわん、たゞ一佛名いっぶつなむを  
 專念せんねんするに、足たれり。

ぞ仰おほせられた。われら今日こんにち、この尊たふとい御法みのりにあふたのは、決けつし  
 て偶然ぐうぜんではない、多生曠劫たしやうくわうこつの宿縁しゆくえんにより、如來善巧にょらいぜんかうの御手おてまはし  
 の御おかげなれば、たゞ我わが身の仕合しあはせを喜よろこぶごごもに、有縁うえんの  
 人々ひとぐにこれを傳つたふるが、眞しんに報佛恩ほうぶつおんに成なるこの仰おほせである。

三

蓮如上人れんにしやうにんは、眞宗教團しんしゆけうだんの善知識ぜんちしきとして、佛法ぶつぽうにつけ世法せぽうにつけ  
 て、こまぐと御教示ごけうじなされたことである。四帖目初通しよつめしよつづうには「我  
 が往生わうじやうの一段だんにおいては、内心ないしんにふかく一念發起ねんほつきの信念しんねんをたくは  
 へて、しかも他力佛恩たうりきぶつおんの稱名しやうみやうをたしなみ、そのうへにはなを王法わうぽう  
 をさきとし仁義じんぎを本ほんとすべし」と、本末次第ほんまつしだいを明あきらかに示しめさせられ  
 た。古來妙好人こらいめうかうにんと云いはれたる大和やまとの清九郎せいくわうらう、三河みかほの七三郎しちざうらう、讃岐さぬき

庄松なご、何れも立派な人々であつた。これを思ふご「佛法者は法の威力にて成るなり。されば佛法をば學匠物しりは云ひたてず、たゞ一文不知の身も、信ある人は、佛智を加はへらるゝ故に、佛力に候あひだ、人が信をさるなり」蓮如上人は仰せられたのである。「聖人の徳、禽獸に及ぶ」云ふ。清九郎は、つねく家を使用する駄馬をいたはりて、歸り路には、荷物を乗せななんだと傳へ。又夏には馬が、蚊になやまさるゝのを心配して、夜中に時々起き出て、蚊遣り香を焚きそえてやりたご傳へ、又玉潭師に伴はれて越中へ往きたる節は、歸り路に飛驒の山中にて清九郎の老體なるを、師が案じて強いて馬に乗せられた。いよく馬を下りる時、馬の背をなで、少しの錢を馬子に取らせ、これで馬

の好むもの買ふて與へて呉れご云ひつゝ分かれたりご傳へて居る。又古來在家宗たる今宗の如きも、精進日ご云ふがある。勿論これを以て往生淨土の因にしやうご云ひではないが、佛恩師恩又は縁者の事なごを追憶して、せめて一日なりごも心靜かに念佛勤行にいそしみたいご精進する報恩の心がけてある。「妻子を帶し魚鳥を服し、罪障の身なりご云ひて、さのみ思ひのまゝにはあるまじき由」蓮如上人は仰せられたのである。又清九郎が、老母を奉じて御本山へ参りたるに、我々ごごきが籠に乗せて上洛したご云はれてはご懸念して、母を背に負ふて参りたご云ふ。一々皆その道理に叶ふたる動作は、佛智の御なしわざである。いよく此の法縁を喜ぶ身は「佛法の上より、何事もあいはたらくべき」こ

ごを忘れてはならぬ。山林生活の修行のかはりに、御冥加をかしくみて、佛法世法に心がくるが、報恩のいごなみである。

(昭和四年十二月二十五日)

### 萬劫にも得がたき信心

我が宗祖聖人の御一代、御本書「教行信證文類」を始め、御晩年の御撰述にいたるまで、たゞ御師匠法然聖人の御化導によりて、如來選擇の本願を聴き、萬劫にも獲がたき他力金剛の信心を決定したまひ、聞く所を慶び、獲る所を嘆じたまひたる外はあらせられぬ。當流を淨土の眞宗と稱したまふ。淨土眞宗の宗名は、

正しく宗祖聖人に始まる故、聖人は宗の御開山に違ひない。されど聖人の御意には、御自身に別の正宗を開かうと云ふおぼしめしはない。たゞ法然聖人の淨土宗即ち如來選擇の本願、南無阿彌陀佛一ツで往生すご仰せられたる、その正意を明かにし、清淨眞實の如來大悲の御眞實を頂くばかりで、極惡深重の我等が無上妙果の大涅槃界に上るを得るぞこの御よろこびより、如來願心の徹到したる他力金剛の信心を先として御示しあらせられたのである。

御開山聖人は、つねに御化導を蒙る宗門の祖師であらせられて、自ら別に珍しき法門を立てやふの弘めやふこの御意はあらせられなんだ。あくまで法然聖人の御教を眞實に御受けをし、教の

萬劫にも得がたき信心

まゝに奉行せんごて、浄土眞宗と稱せられたのである。法然聖人の浄土宗は選擇本願念佛を、如實に信受奉行する宗であるごて、浄土眞宗と仰せられた。浄土眞宗の四字宗名は、正しく我が聖人より生まれごも、弘願の一乗念佛往生が、浄土眞宗ゆえ、

智慧光ノチカラヨリ

本師源空アラハレテ

浄土眞宗ヲヒラキツ、

選擇本願ノベタマフ

ご讃ぜられた。

法然聖人は貴賤道俗、智愚善惡、いかなる人に對しても、本願だから念佛せよこの御化導であつた。然るに自力の執心は離れがたく、他力の念佛を、口稱の功に由るご心得て、如來が五劫に思惟し、永劫に修行して、特別に凡愚底下の我等のためにこそ、廻

向成就したまへる、超世無上の選擇不思議の名號たるいはれを、いたゞく人が稀であつた。

他力の信心は難中之難である。いかにも難信の法たるを知りて、大事の中の大事たるごを思はねばならぬ。法然聖人の門下の人々が、多く自力に拘はりて、他力金剛の眞心をいたゞきかねた人の多かつたのは、決して不思議なごではない。然るに我が宗祖聖人「あ、弘誓の強縁は多生にも値ひがたく、眞實の淨信は億劫にも獲がたし、たまゞ、行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」御自ら深くこの多生曠劫の宿縁を、よろこばせらるゝより、若し法然聖人の化導なかりせば、空しく流轉を重ねねばならぬが、今明かに如來選擇の願心を聞き、名號不思議の信心を得たる喜びより、

御師匠の御化導の正意は本願念佛の一行、それを己が計ひなく信ずる一ツにて、如來は心光に攝め取りて、必ず安養の妙果を得しめたまふ。これが本願成就の意ぞにて、淨土の眞宗を傳へさせられた。我が聖人の淨土眞宗は、あくまで受くる宗門の開宗で、開宗ならざる開宗ならせられたのである。我が聖人は眞實に云へば、凡夫にはない。たゞ如來のみ眞實である。如來廻向の宗なる故、淨土の眞宗である。念佛は眞實の不行、それを信ずる信心亦如來願心の徹到、行も信も、如來のたまものである。淨土眞宗は、全く私ならざる御宗門である。蓮如上人「御一代聞書」二條には

凡夫ノ身ニテ後生タスカルコトハ、タダ易キトバカリ思ヘリ。

難中之難トアレバ、タヤスクオコシガタキ信ナレドモ、佛智ヨリ得ヤスク成就シタマフ事ナリ。往生ホドノ一大事、凡夫ノハカラフベキニアラズトイヘリ、前住上人仰セニ後生一大事ト存ズル人ニハ、御同心アルベキヨシ仰セラレ候ト云

ごある。この意を以て「御文」の御教化をいた、かねばならぬのである。

蓮如上人、報恩講の御齋の時、この中に信心を得たる人いく人あるべきぞ、一人か二人かあるべきかご仰せられた。若狭の國の治郎三郎は、その一人か二人の中へ、私が這入りてあれば善いのご云ふて、歸國を延ばし、能く蓮如上人の御教化をうけたまはりて歸國せられたご云ふ。大事ご云ふことが知られたら、いくえに

も御法を大切にいたゞかねばならぬこの手本である。

眞實信心ウルコトハ

末法濁世ニマレナリト

恒沙ノ諸佛ノ證誠ニ

エガタキホドヲアラハセリ

(昭和六年八月十五日)

### 法然上人と女人往生

一

女人往生の別願があることは、彌陀大悲の至極であつて『觀經』では韋提希夫人の願生を説きたまひ、『阿彌陀經』では善男子善女人が、聞説阿彌陀佛執持名號によつて、必ず往生をこぐべきを説き、十方諸佛、異口同音に、之れを信ずべしと勧められたるここ

が見えてある。これによつて善導大師は『觀念法門』の攝生増上縁には、「若し人ありて、女人淨土に生まるゝことをえずと云はゞ、これは是れ妄説、信ずべからず」こまで示させられた。

我が朝の法然上人、偏へに善導一師に依りて、八家九宗の他に、淨土の一宗を別立したまふたは、彌陀選擇の別願超世無上の大悲を開顯して、善惡の凡夫、男女老少を簡ひたまはぬ念佛往生の一途を、明かならしめんためと思し召す外はない。選擇の本願が念佛往生、これ一つが凡夫出離の一道ゆる雜行雜修をすて、一向專修の念佛を信ぜよと、勧めさせられた。住蓮安樂等の死刑も、法然上人親鸞聖人の流罪も、たゞ一向專修が問題となつたことを忘れてはならぬ。たゞの念佛ならば、當時の南都北嶺は、到

る處甚だ盛んに修行せられてあつたのである。然るに法然上人、ひこたび専修念佛の淨土門を開きたまふや、乾き切りたる薪に、火のうつるが如く、出離得脱、無上菩提をもごむる道俗男女、我もくご歸依するに至りた。

「本師源空世にいで、

弘願の一乗ひろめつ、

日本一州ここへく、

淨土の機縁あらはれぬ」

こゝに於て、南都北嶺の妨難が起こり、つるに専修念佛宗を禁ずると云ふ大事件が起こつたのである。

二

今法然上人の御化導の上に於て、東大寺再建の供養會に御出でになり、半作の大佛殿に極樂の曼陀羅や、曇鸞等五祖の影像をか

け、三部經ご五祖を講讚したまうた。大經の中に於て、特に第三十五願の佛意ご、女人に對する諸寺諸山の現在の狀態ごを、こまかくご講ぜられたことは、「拾遺古德傳」の第四に見え、それが存覺師の『女人往生聞書』にも傳へられ、又有名なる『三部經釋』にも記るされてある。女人往生の容易く出来るご云ふは、彌陀の別願よりのことではあるが、當時ごしては、ゆゝしき大問題なのである。委しきごは、右の書に出で、人みな周知の次第ゆゑ、それは今は略することとする。

三

法然上人は、承元元年三月十六日、京都を出で配所へ趣きたまう、その道すがらの御化導は、一々みな尊きごばかりなれご

も、中に於て播州高砂浦の老たる漁師夫婦の如きは、御教化にあひ喜ぶことかぎりなく、日々、晝は浦に出で、手にすなごりをすること止まされども、口に名號を稱へ、夜は家にかへりて、二人ごもに、聲をあげて稱名するに、つるに臨終めでたく、往生の本懷をこげたりと云ふ。

又同國室の泊りにつき給ふに、小船一艘ちかづきたる。これ遊女なり。遊女申すやう、上人の御船の由うけたまはりて推參しはべるなり。世を渡る道まちくになり、いかなる罪ありてか、かかる身となり侍るらん。この罪業をもつ身、いかにしてか、のちの世、たすかり候ふべきと申しければ、上人あはれみたまひて仰せられけるには、

罪業まここに、かるからざれば、酬報また、はかりがたし。もししからずして世をわたるべきことあらば、すみやかに、そのわざをすて給ふべし。もし餘のはかりごともなく、又身命をかへりみざるほどの、道心いまだおこりたまはずは、たゞそのまゝにて、もつばら念佛すべし。彌陀如來は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をも立てたまへることにて侍れ。たゞふかく本願をたのみて、あへて卑下することなかれ。本願をたのみて念佛せば、往生うたがひあるまじきよし。

ねんごろに教へたまひければ、遊女、隨喜の涙をながしけり。のちに上人のたまうやうは、この遊女、信心堅固なり、さだめて



往生をこぐべしと、御歸洛の時、こゝにてたづねたまひければ、上人の御教訓をうけてのちは、あたり近き山里にすみ、一すちに念佛したるが、いくほごもなく、めでたく往生をこげたり、こ人申しければ、上人「しつらんくゝこそ仰せられける」

右は『拾遺古徳傳』第七卷、『四十八卷傳』第三十四卷を抄記したのである。これにても上人が女人、特に卑賤の業にたづさはれるものを同情し、あはれみたまへるここが知られる。

四

悪業は悪業にて、善業ではない。されば來生は必ず惡道へ沈まねばならぬ。何人によらず、思はねばならぬは、こゝである。悪業は善いのではない。されご是れが止まぬのは、よくくゝの宿業

である。彼の阿闍世王、さては韋提希夫人が、我はまここに惡人であるご氣が付いて、心底から恐怖をおこした。その時、多くの臣下などは、阿闍世王の御前に出て、種々の慰安の言を以て、あなたは悪くはないご申しても、阿闍世王の心には、落ち付かれぬ。そこへ耆婆大臣が来て、「あなたのなされたことは悪るかつた。されご悪いご御氣付きなされたことは善いことである。慚愧の心あるものは、人間である。左なくば畜生である。あなたを救ふ御方は、たゞ佛世尊の外にはない」さて、同車して佛前へ参り、つるに無二の信者となりて王法ご佛法ごに、全生涯をつくされたことは、『涅槃經』に出で、吾が宗祖聖人は『御本書』信の卷に、長々ご御引用なされてある。今法然上人の、漁夫や遊女へ對

して御化導の御言は、正は正、邪は邪、明かに道を正し、而して御同情ふかき御語を以て、彌陀大悲の特別の誓願を教へ、たゞ一すじに本願を信じて念佛せよと示させられた。今日の我等も、この御教化を頂かねばならぬ。

我が本願創立の覺信尼公が、本願眞實を敬信して、御宗門の基礎を定めたまひしも、全くこの信念のあらはれであるを思ふとき、本願寺の源泉の、滾々として盡きぬ意味が尊まれるのである。(昭和七年三月一日)

### 眞宗の教法

#### (イ) 眞宗の教旨

我が眞宗は、宗祖聖人が「大無量壽經」を眞實の教と定め、この經に説かれたる如來の本願眞實をいたゞくことによりて、必ずたすかる旨を示されたるが、御本書「教行信證文類」を始め御一代の著述である。しかし聖人は自義を主張しやうとするのではない。あくまで御師匠法然聖人の教示を眞奉したまひ、自ら受け身になつて慶嘆せられた外はない。「愚禿勸むるところ、さらに私なし」と云ひ「如來の御代官を申しつるばかりなり」と仰せられ、「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰

せをかうむりて信ずる外に別の仔細なきなり」この御語は、受くる宗門の祖師であつて、御同朋御同行の御先達ならせられたのである。我等この法に遇ひたるものは、常にこの御先達に隨はねばならぬ。

『大無量壽經』の本願眞實とは、即ち念佛往生のここはりである。此の身にて悟れこの教ではない。次生に淨土に参りて無上の涅槃をささらしめんさて、この凡夫ながら涅槃の門に入る道である。それは外ではない。念佛の一法を信じて修するここである。我等もし餘の行にてもこの生死の迷をはなる、を得るならば如來は我等のために別願を發こしたまふことはなかつたのである。何れの行も修するこここの出來ぬ我等のために、いかなる身柄のも

のも、いかなる職業にたずさはるものも、今直ぐに受けらるゝやうにさて、念佛往生の信を與へらるゝこことなつた。念佛とは即ち南無阿彌陀佛。如來御自身の御名である。

然るに佛も多くおはします、その中で我は御身の親ぞご名のりたまふは、この御佛である、世の中に男子は多い。父さんは一人である。世の中に婦人は澤山ある。母さんは一人である。「釋迦彌陀は慈悲の父母」はこのことである。權利をも義務をも忘れ、たゞ立派の人間に仕立ておふせたいさて、慈悲をかたむけ、智慧をしぼりて育つるが眞實の兩親である。我等日々、夢の如く其の日くを送り迎へて、ゆく末は如何になりゆくかを案じもせず心配もせず居る。かゝる我等に山に入れ、林にかくれて工夫

をし修行をせよごは仰せられず、満足大悲の御心よりそのまゝで念佛せよ、我は必ずたすくるご、喚びかけらるゝが念佛のいはれである。この廣大無碍の大悲眞實を一向にいたゞき、何事のはからひもなく一心に信じて稱へ喜ぶ、これが念佛往生の一道である。

されば蓮如上人は、この南無阿彌陀佛は一心に歸するものを必ずたすくるこの如來の仰せぞご、さしよせて教へさせられたのである。我等因縁あつくして此の教法にあひたてまつるを得た。祖師聖人の御先達に隨ひ、一向に如來の本願眞實をいたゞき、心易く決定して念佛を稱へ喜ぶの幸榮を、空しくせぬやうにいたさねばならぬ。

明治十年西南戦争の起つた時、最初に、くり出された一人に朝侍繁十郎と申す人があつた。郵船に乗つて鹿兒島灣に上陸しやうとするご、港の商店と見えたるものより、突然打ち出す銃聲に、一同は一時退却せんとした。繁十郎は立ち上り「死ねば極樂だ、やつつける」と叫んだので、難なく上陸して進んだと云ふ美談が傳へられてゐる。

今や國家多事の時、いくさの庭に立つも立たぬも常に生死の問題に安心して、念佛をこなへつゝ、堂々として其日々々を進まん覺悟を定むるが、最も大切のここである。

無碍光の利益より

威徳廣大の信をえて

かならず煩惱の氷こけ

すなはち菩提の水こなる

我が宗祖聖人は讚じたまひてある。(昭和七年新正草之)

(ロ) 蓮如上人の御勸化

蓮如上人を中興上人と申し奉り、明治十五年には、慧燈大師の諡號が宣下されたのである。御化導の盛んなることは、内地は申すに及ばず。遠く今の滿洲奉天の西北地方、契丹の人まで、はる／＼尋ね参りたりと傳へらるゝにても知らるゝ所である。然るに當時の世の中は、應仁文明の大亂 あたり、當時、世上ノ體タラク、イツノコロニカ落居スヘシトモ、オボヘハンベラザル風情ナリ。シカルアイダ諸國往來ノ通路ニイタ

ルマデモ、タヤスカラザル時分ナレバ、佛法世法ニツケテモ千萬迷惑ノオリフシナリ、コレニヨリテ、アルヒハ靈佛靈社參詣ノ諸人モナシ。コレニツケテモ、人間ハ老少不定トキクトキハ、イソギイカナル功德善根ヲモ修シ、イカナル菩提涅槃ヲモ、ネガフベキコトナリ。シカルニ、イマノ世モ末法濁亂トハイヒナガラ、コ、ニ阿彌陀如來ノ他力本願ハ、イマノ時節ハ、イヨ／＼不可思議ニサカリナリ。(御文四ノ三通)

ご仰せられて、いかなる人も、足下より戦争が始まつて居り、公卿衆や大名衆は、晝夜戦争にたづさはり、百姓町人は金錢衣食、人夫なごに徴發され、又國々處々には番人が立ち、いづれも皆、戦々恟々として、不定の世の中の有り相を見せられて居る。さて

も聖教を讀み研究するの、修行するの云ふ様なことは、全く出來ない時代である。さりさて「人間ハ老少不定トキクトキハ」ごうかせねば、じつごしては居られない。それゆゑ、兎も角「念佛」を稱へて居れば、ごうかなるだらうご言ふ心得になる。

人間ハ不定ノサカヒナリ、極樂ハ常住ノ國ナリ。サレバ不定ノ人間ニアランヨリモ、常住ノ極樂ヲネガフベキモノナリ。……ソレ人間ニ流布シテ、ミナ人ノココロエタルトホリハ、ナニノ分別モナク、クチニタダ稱名バカリヲトナヘタラバ、極樂ニ往生スベキヤウニオモヘリ。ソレハオボツカナキ次第ナリ。

ご仰せられて、次に

他力ノ信心ヲトルトイフモ、別ノコトニハアラズ、南无阿彌陀佛ノ六ノ字ノココロヲ、ヨクシリタルヲモテ、信心決定ストハイフナリ。(御文五ノ十一)

さて、願成就の文に、言南无者の釋を引きて、手ぢかく皆人の知れる六字名號より、願力他力のこゝろを開き示し、この末法濁亂の者を、本きたすくる、如來の願心を知らしめ、一心に我をたのめ、必ずたすくるぞ、ご待ちわびたまへる、大悲眞實が名號のいはれなれば、佛願の不思議を、一心に信じ、一向にたのみて、一大事の後生に安心し、喜びまもりたまふ不捨の光明中に、報恩の稱名を稱へ喜べ、ごさしよせて御化導くだされたのである。

カカル世ノナカノ風情ナレバ、イカニモ一日モ片時モ、イソギテ信心決定シテ、今度ノ往生極樂ヲ一定シテ、ソノノチ人間ノ

アリサマニマカセテ、世ヲスゴスベキコト肝要ナリト、ミナ  
くココロウベシ。(御文四ノ十三)

いかにも簡明に、わかりやすく、さしよせての御示しである。  
今の世の中、理窟は次にして、この御親切なる教示をいたゞかね  
ばならぬ。(昭和七年二月二十二日太子會の夜草之)

(ハ) 契丹國人の來聽

今は滿蒙問題が、いよく本型となつて來た。つらく思ふ  
に、我が佛教が支那朝鮮を経て傳はり、我國に於て、その眞義が  
開顯されて來たところは、皆人の知れる所である。而して我朝の佛

教が、支那の方へ傳へられたのは、聖德太子の「勝鬘經疏」を最  
とすべきである。源信和尚の「往生要集」も彼の地の人に尊信せ  
られたところが、和尚の師慈惠大師の別傳に見えて居る。然れども  
支那の人がわざわざ求法のために日本へ來たところは、餘り聞かぬ  
ことである。恐らくは蓮如上人の時、契丹國の人が、來朝したの  
が、實にその始でありまた終りであつたらふ。契丹は今の滿洲  
の地に起こりたる遼の國を言ふのである。その御化導にあづかり  
たる記事は、左の通りである。

『蓮如上人御物語』右七には

蓮如上人ノ御代ニ契丹國ノ人、我朝ニ來テ、御勸化ヲ受ケシ事  
アリ。其昔、彼ノ國ノ人、子ヲ一人モチタリシヲ失ヒ、ナゲキ

ノアマリ、觀世音菩薩ニ後生菩提ヲイノリ侍リシニ、アラタニ示現ヲカウムリケリ。其告ニイハク、日域ニ渡ルベシ。念佛ノ一門繁昌ノ宗體アリ。カノ勸化ヲウケテ、後生ノ一大事ヲサダムベシ、ト示現タシカニ蒙リテ、日本ニワタリ、和泉ノ國、堺ノ津ニ著岸シ縁ヲタツネテ、本願寺ノ上人ニ、後生ノ一大事ヲウケタテマツルベシトテ、堺ノ御坊、蓮如上人へゾマイリケル。スナハチ御教化ヲタビ、ウケ申シ、有リガタシトテ、本國契丹國ニ歸リケリ。不思議ナリシ事ドモナリ。異國ノ言説モ、タガハズヤ侍リケン。領解セシメケルコソ奇妙ナレ。

ご記せり。此書奥書には「天正八年九月中旬清書之」ごありて、この書を香月院等の諸先輩、天正八年實悟記ご申され、「蓮如上人

御一代記聞書」を、天正十三年記ご稱し、上人言行録の姉妹篇ごして取り扱はれてある。

契丹國ごは、今の奉天府の西北なる遼源、通遼の邊より起りて、一時、遼ご稱して榮へたる國民である。然れば今の滿洲より、はるく、蓮如上人の御化導を、傳へき、泉州堺へ着き、同地にて他方本願のここはりを聽聞して、法喜に満ちて歸國したごこである。蓮如上人の時代は、支那の明の代、我が足利時代の中期にて、支那朝鮮等の交通は、堺の港が最も盛んであつた。「御聞書」に見えたる堺の日向屋ご言ふは、當時の大貿易商であつたのであらう。彼れ此れ想ひ合はすれば、蓮如上人の御晩年、大阪や堺に化導したまうた頃は、支那や朝鮮の人々にも、御化導の盛



んなる様子が傳へられ、而も淨土往生念佛法門の勸化なるをも、  
尊されたと言ふことが分かる。さればこそ、滿洲の奥地より、觀  
音の靈告をうけて、はるく尋ね参りたので、いづれ通譯を以て  
たびく聽聞したのである。當時の大開港地ゆゑ、必ず通譯のあ  
つたことは勿論である。これによりて上人御勸化の盛んなること  
が知らるゝ。(昭和七年二月二十二日太子御祥忌の夜草之)

(二) 大和民族の理想

四方の海、みな、はらからと思ふ世に  
なご波風のたちさわぐらん

世界萬國は、みな同胞であり、兄弟であると思ふのであるに、  
ごうして戦争など言ふことが起るのであらうか、ご明治の聖天子  
が仰せられた。この御製によつて、日露の戦役が、終りを告げ、  
平和を迎へたご承はるごことである。別して東亞の民族は、大概同  
一の人種であると思ふ。然るに今は、その大部分が、歐米人のた  
めに、抑へられて居て、多くは頭が上がらぬのは、まことになさ  
けないごことである。日本も亦、四五十年前までは、西洋人のため  
に、種々無法の難をかけられたが、上御一人より、下國民の末々  
まで、必至の努力によりて、國力が充實し、世界列強の一流格に  
なつて來たごことは有りがたいごことである。いよく、自強自勵し  
て、同心一意、天恩國恩に報じたてまつらねばならぬ。

我が御國は大和の國であり、平和を樂しむが、建國の大精神である。近く聖徳太子が十七憲法の第一條に、「和を以て貴しとす」ご宣し第二條に「篤く三寶を敬へ、三寶は佛と法と僧となり、則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。それ三寶に歸せずんば、何をもて枉れるを直くせん」ご示させられた。此信念によつて、我が國が築き上げられ、いよく明治の御世より着々其の理想を發揚するこゝとなつた。

今日、出征諸士が御國のために、身を鴻毛の輕きにおきて、忠誠を抽んでらるゝこゝは、實に感謝にたえぬところである。我が帝國の前途は、正義公道に立ちて、東洋民族の和合をはかり、世界萬國平和の天地を樂しまねばならぬ。これが明治聖天子の大御

心であるごうかがひたてまつる。

國のため、あだなすあだは、くだくごも

いつくしむべき、こごな、わすれそ

これでこそ、眞の平和は來たり、永久の和國は開かれるのである。我等國民は、常に自他平等の慈眼を以て、建國の大精神たる平和の天地を開かねばならぬ。一日も早く隣邦民族にも、我國の理想を了解せしめ、信義仁愛の眼を開かせて、手に手を執りて互に、東洋平和の道に進みたいご念ずるごであります。

上宮皇子方便シ

和國ノ有情ヲアハレミテ

如來ノ悲願ヲ弘宣セリ

慶喜奉讚セシムベシ

(昭和七年三月草之)

## 女人成佛の和讃

一

本年は我が本廟創立者としての覺信尼公、即ち彌女の方の六百五十年忌に相當するので、御本山にては、特にその御法要が修行せらるゝところなり、時勢に鑑みて婦人運動を奨励せらるゝご承はる。全體從來各宗の興隆や、その歴史では全く婦人だけは、別物となつてあつたところは、皆よく承知のことである。然るに我が宗祖聖人、末法の宗教として、肉食妻帯の宗風を開かせられた。如來の御本願に已に十方衆生ご誓はせられ、別して女人のために三十五の願を發させられて、男女善惡に簡びのない大慈大悲の御

心を、信受し弘通したまひたので、御滅後、本廟の創立が、正しく女性たる覺信尼公の御力に由れるご申すことは、まことに思へば、一種の不思議であり、而も其御遺志にて御血統を以て、御留守職を相續したまうところ、定まりしご言ふも、亦ありがたきことである。一時衰退の後、八代目蓮如上人に至りて御再興となつたのにも、特に女人往生の點に御注意あらせられ、女人の熱烈なる信念が、非常にその力を添へたところは、『御文』の上を拜見しても、氣の付くところであらう。

末法の時代として、日蓮上人なごも、隨分女人の方に注意のあつたところは、思はるれごも、別に尼生活があり、又清僧を以て法脈法統を繼がしめたるのは、未だ徹底したる末法の時機相應の

教法けうほふとはならなんだと思ふ。されば眞まことに在家止住ざいけしぢゆうの凡夫ぼんぶながら、直ただちに往生成佛わうじやうじやうぶつの出來できる道みちの開ひらかれたるは、ひこへに我が、宗祖しゆそ聖人しやうにんの御一流ごいちりゆうにかぎるのである。

二

今我いまわが聖人しやうにんの御聖教ごしやうけうにつきて、女人往生にょにんわうじやうの別願べつぐわんたる第三十五願だいしごごぐわんの出いづるのは、實じつに和讃わさんに於おいて、あるを注意ちゆういせねばならぬ。聖人しやうにん御一代ごいちだいの撰述せんじゆつ、その數多かずおほき中うち、元仁元年げんにんげんわんにん五十二歳さいの御本書ごほんじよ「教行信證文類ぎやうしんしやうもんるい」には、一部いぶの前後ぜんごに、韋提希夫人ゐだいけしふじんが往生わうじやうの先達せんだつとなられたここがい出でて、又信またしんの卷まきには「凡およそ大信海だいしんかいを按おんずれば、貴賤きせん緇素しそを簡えらばず、男女老少なんにょらうせうを謂いはず」云云うんぐんと仰おほせられて、大悲だいひの本願ほんぐわんには、男女なんにょの辨別べんべつなき旨ねは、明あきらかに示しめさせられたれども、第だい

三十五願ぐわんの事ことは、別べつに仰おほせられたるを見ぬ。

然しかるに御歸洛ごきらく後ご、十六七年じゅうろくにんねんを経へたる七十六歳しちじゅうろくさいの時御草稿ときごさうかうの「淨土和讃じやうどわさん」「高僧和讃かうそうわさん」へ來くるこ、大經第十八願だいきやうだいじゅうはちぐわんの十方諸有じやうしやうしゆの衆生しゆじやうの中うちより、「彌陀みだノ大悲だいひフカケレバ、佛智ぶつちノ不思議ふしぎチアラハシテ、變成男子へんじやうなんしノ願ぐわんヲタテ、女人成佛にょにんじやうぶつチカヒタリ」の一首しゆを作り、「三十五願ぐわんノココロナリ」の首書かしらかきまでなされてある。又善導大師またぜんだうだいしの和讃わさんでは、彌陀釋迦みだしやくか二尊にそんの大悲だいひを讃さんじたる初はじめに、「彌陀みだノ名願なむぐわんニヨラザレバ、百千萬劫ひやくせんまんにやくスグレドモ、イツツノサハリハナレネバ、女身にょしんチイカデカ轉てんズベキ」と仰おほせられた。これなにゆゑであらう歟。つらく我が、聖人しやうにんの御意ごいを拜はいし奉たてまつるに、關東時代くわんとくじ即すなはち六十歳さいのころまでは、御裏方ごうらかたも、御子供衆ごこどもしゆも、みな一處しよにあらせられ、